

### 法政大學講義録

吾孫子, 勝 / 杉本, 貞治郎 / 島田, 鐵吉 / 若槻, 禮次郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大學

(巻 / Volume)

11

(号 / Number)

特別法

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1904-02-03



(明治三十六年十月十二日第三種郵便物認可)  
每月四日五日八日十一日十五日十八日廿一日廿五日廿八日發行

明治三十七年二月三日發行

特別法ノ十一

# 法政大學講義録

第三拾五號



法政大學發行

特別法第十一號目次

現行租稅法論(自三七七) 法學士 若槻禮次郎

戶籍法(自三〇九) 法學士 島田鐵吉

表紙及目次 六頁

競賣法(自三七) 法學士 吾孫子勝

特許法(自九一) 法學士 杉本貞治郎

雜報 ○家資分産ノ宣告ト公民權ノ停止○町村役場書記ノ職務○區ノ書  
記ト財産保管ノ義務○戶籍謄本ノ性質

090  
1903  
5-11

以テ利子支拂者ハ其利子ニ付キ所得稅ヲ徵收セザルヘシト雖モ若シ其證券モシ  
テ無記名ナルトキハ其證券ハ營利ヲ目的トセザル法人ニ屬スルヤ否ヤ不明ナ  
ルヲ以テ利子支拂者ハ之カ所得稅ヲ徵收スルノ途ニ出ツルノ外ナカルヘシ然  
レトモ此ノ如キハ法律カ營利ヲ目的トセザル法人ノ所得ニ課稅セザルコトヲ  
定メタル趣旨ヲ貫徹スルモノト謂フヘカラス故ニ所得稅法施行規則第三十五  
條ハ營利ヲ目的トセザル法人ニシテ無記名ノ公債證券又ハ社債券ヲ取得シテ  
ルトキハ其發行者又ハ讓渡人ヲシテ營利ヲ目的トセザル法人ノ所有ナルコト  
ヲ證明セシメ之ヲ利子支拂ノ取扱所ニ通知シ豫メ其所有ヲ明カニスヘキコト  
ヲ定メ以テ此方法ニ依リタルモノハ利子支拂ノ取扱所ヲシテ其利子ニ付キ所得  
稅ヲ課スルカ如キコトナカラシメ此方法ニ依ラザルトキハ事實ニ立入りテ調査  
ヲ爲スヲ要セス之カ所得稅ヲ徵收シテ可ナルモノト爲シタリ所得稅法施行規  
則第三十五條ハ廣ク無記名ノ公債證券又ハ社債券ニ付テ規定ヲ爲スト雖モ同  
條ノ趣旨タル利子支拂者ニ於テ所得稅ヲ徵收スヘキ場合ニ於テ營利ヲ目的ト  
セザル法人ノ受タル利子ニ付テハ之カ徵收ヲ爲スカ如キコトナカラシメント

スルニ在ルモノナルヲ以テ所得稅法施行地ニ於テ利子ノ支拂ヲ爲ス公債社債  
 ニノミ止マルヘキコト規定ノ精神自ラ然ラシムルモノナリト謂ハサルヘカラ  
 (ホ) 營利ノ事業ニ屬セサル一時ノ所得 一時ノ所得トハ廉價ニ買得シタル物  
 ニシテ偶然高價ニ賣却セラレ其間ニ不時ノ利益ヲ爲シタル如キヲ謂フ此ノ如  
 キ利益ハ常時豫期スヘキモノニアラサルカ故ニ法律ハ之ニ所得稅ヲ課セサル  
 ヲ相當トシタリ而シテ法律カ特ニ營利ノ事業ニ屬セサル一時ノ所得ト限定シ  
 營利ノ事業ニ屬セサルコトヲ要件トシタルハ營利ノ事業ヲ爲ス者カ營業上所  
 謂掘リ出シ物ヲ爲シテ不時ノ利益ヲ得ルカ如キハ臨時ノ收入ナリト謂フト雖  
 モ而モ此ノ如キハ營業上ニ常ニ有リ得ヘキノ事ニシテ非營業者ノ偶然ノ利益  
 トハ同日ノ論ニアラサルヲ以テ之ヲ課稅外ニ置クノ必要ナシト爲シタルニ由  
 ルモノナリ

(ニ) 外國又ハ所得稅法ヲ施行セサル地ニ於テ有スル資產營業又ハ職業ヨリ生  
 スル所得 所得稅ハ對人的租稅ナルヲ以テ苟モ人カ所得稅法施行地ニ關係ヲ有

スル以上ハ其所得ハ何レノ地ニ於テ生スルモ之ヲ標準トシテ課稅スルコト何  
 等ノ妨アルモノニアラス然レトモ外國又ハ所得稅法ヲ施行セサル地ニ於テ生  
 スル所得ニマテ所得稅ヲ課スルコトトセハ所得稅法ノ法力ノ及ハサル所ニ向  
 ヒテ調査ヲ進メサルヘカラスシテ其困難繁雜ハ測ルヘカラサルモノアラントス  
 若シ課稅ノ公平ヲ保ツカ爲メ之ヲ必要トスルモノナリトセハ調査ノ困難繁雜  
 ハ之ヲ忍ハサルヘカラスト雖モ外國又ハ所得稅法ヲ施行セサル地ニ於ケル資  
 產營業又ハ職業ヨリ生スル所得ノ如ク所得稅法施行地ニ於ケル所得ト劃然區  
 別セラルルモノニ在リテハ之ニ課稅セサルモ爲メニ生存競争上ノ不公平ヲ生ス  
 ト謂フニモ至ラサルヘキカ故ニ法律ハ之ニ所得稅ヲ課セサルコトト爲シタリ  
 法律ハ明カニ資產營業又ハ職業ニ依ル所得ト官フヲ以テ所得稅ヲ課セサル所  
 得ハ外國又ハ所得稅法ヲ施行セサル地ニ於ケル資產營業又ハ職業ヨリ生スル  
 所得ニ限ルモノナリ恩給年金等ノ如ク資產營業ヨリ生スルニアラス又營業者ハ  
 職業ヨリ生スルニモアラサル所得ハ之カ支拂義務ハ外國又ハ所得稅法ヲ施行  
 セサル地ニ在ル場合ト雖モ所得稅ヲ課スルニ於テ何等ノ支障アルモノニアラ

外國又ハ所得稅法ヲ施行セザル地ニ於ケル資産營業又ハ職業ニ依ル所得ニ所得稅ヲ課セザルノ規定ハ一ノ除外例ヲ有ス即チ所得稅法施行地ニ本店ヲ有スル法人カ其所得者ナル場合はナリ蓋シ法人ノ決算ナルモノハ一事業年度間ニ於ケル總損益ニ付キ計算ヲ爲スモノナルヲ以テ外國又ハ所得稅法ヲ施行セザル地ニ於ケル資産營業又ハ職業ニ依ル所得ニ課稅セザルノ規定ヲ所得稅法施行地ニ本店ヲ有スル法人ニマテ及ホストキハ法人ノ損益計算ヲシテ徒ニ複雜ナラシメ煩勞ヲ負ハハムルコト鮮シトセス此ノ如キハ少許ノ稅額ヲ少クスルカ爲メ多大ノ煩勞ヲ課スルモノナルヲ以テ法律ハ之ヲ取ラザリシナリ

(下) 所得稅法ニ依リ所得稅ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金、法人ナルモノハ箇人ノ外ニ別ニ特立シテ人格ヲ有スルモノナルカ故ニ法人ニ課稅シタル後之ヨリ配當ヲ受ケタル箇人ニ付キ更ニ所得稅ヲ課スルコトハ理論上之ヲ以テ重複ノ課稅ト謂フコトヲ得然レドモ元來箇人相集リテ營利ヲ目的トスル法人ヲ設立スルハ之ニ依リテ利益ヲ得ントスルニ在ルヲ以テ法人ノ利益耶

チ其所得ニ課稅スルハ間接ニ箇人ノ利益ニ課稅シタルモノナリ故ニ法人ノ利益ヲ分配スルニ當リテ其配當金ニ付キ更ニ箇人ニ課稅スルトキハ同一ノ利益ニ付キ再度ノ課稅ヲ受ケルカ如キ感想ヲ懷クハ人情ノ免レタル所ナリ蓋所得稅法ニ於テハ法人ニハ全ク所得稅ヲ課セザリシニ現行所得稅法カ之ヲ改正シテ法人ニモ所得稅ヲ課スヘキモノト爲シタルハ既ニ課稅ノ密ヲ加ヘタルモノナリ然ルニ尙ホ其法人ヨリ受ケタル配當金ニ付テモ亦箇人ニ所得稅ヲ課スヘキモノトセハ改正所得稅法ノ増課ハ稍ヤ急遽タルヲ免レタルヘシ是レ法律カ所得稅ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金ヲ課稅外ニ置キ以テ法律改正ノ經過ヲ緩和シタル所以ナリ

第二 所得ノ計算

所得稅法ノ所謂所得ハ純所得ナルヘキコト前既ニ述ヘタル所ノ如シ然レトモ所謂純所得ナルモノノ見解モ亦各人ノ見ル所ニ依リテ其歸點ヲ同シウセザルモノナルヲ以テ法律ノ明文ヲ以テ之ヲ劃定シ爭疑ノ續出スルヲ豫防スルノ必要アリ所得稅法第四條ハ實ニ此必要ニ由リテ規定セラレタルモノナリ今同條

及ヒ所得稅法施行規則ノ定ムル所ニ依リ三種ノ所得ニ付キ法律カ課稅ノ標準ト爲ス所得ノ何物タルヤヲ明ニセントス

一 第一種ノ所得

甲 所得稅法施行地ニ本店ヲ有スル法人ノ所得ニ所得稅法施行地ニ本店ヲ有スル法人ニ在リテハ各事業年度ノ總益金中所得稅法ニ依リ所得稅ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金及ヒ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債社債ノ利子ヲ除キタルモノヨリ其年度ノ總損金及ヒ前年度繰越金ヲ控除シタルモノヲ以テ其所得ト爲スヘキモノトス若シ其法人ニシテ保險事業ヲ營ハモノナルトキハ總損金及ヒ前年度繰越金ノ外尙ホ保險責任準備金ヲモ控除スヘキモノナリ總益金トハ法人ノ受領シタル一切ノ收入ヲ勿論其所有財產ノ價格增加ニ因リテ生シタル利益モ亦之ヲ包含スルモノニシテ總損金トハ其支出シタル一切ノ經費ハ勿論所有財產ノ價格減少ニ因リテ生シタル損失モ亦之ヲ包含スルモノナリ

總益金中所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債社債ノ利子ヲ除ク所以ノ

モノハ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ爲ス公債社債ノ利子ハ其支拂ノ際第二種ノ所得トシテ所得稅ヲ徵收スルカ故ニ同一所得ニ付キ二重ノ課稅ヲ爲サザルカ爲メナリ所得稅法ニ依リ所得稅ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金ヲ除クコトトシタルノ理由ハ之ト同シカラス所得稅ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金ハ所得稅法第五條ニ依リ所得稅ヲ課スヘカラサルモノナルカ故ニ此ノ如キ金額カ營利會社ノ收入金中ニ包含セラレル場合ト雖モ尙ホ該條ノ趣旨ヲ貫徹センカ爲メ之ヲ控除スルコトト爲シタルモノナリ

法人ノ損益計算ニ於テ總益金中ヨリ總損金ヲ控除シタルモノハ則チ其利益ナルヲ以テ之ニ對シ直チニ所得稅ヲ課課シテ可ナルモノノ如クナルニ法律ハ尙ホ其外ニ前年度繰越金ヲモ控除シ其殘額ヲ以テ課稅標準ト爲スヘキモノト爲シタリ蓋シ前年度繰越金ナルモノハ前年度ノ利益ニシテ其年課稅セラレタルモノノ中ヨリ配當ヲ爲サスシテ後年度ニ繰越シタルモノニシテ一タヒ所得稅ヲ課セラレタルモノナルヲ以テ再ヒ之ニ課稅スルコトナカラシメシカ爲メナリ

保險會社ニ在リテ特ニ責任準備金ヲ課税標準外ニ置キタルハ責任準備金ナルモノハ保險事業ノ理論上將來發生スルニキ推定アル允除ニ對スル準備金ナルカ故ニ未タ之ヲ以テ會社ノ利益ト爲リタル金額ナリト謂フコト能ハサルヲ以テナリ

所得税法第四條第一項第一號及ヒ同條第二項ニ依レテ第一種ノ所得ヲ計算スル場合ニ於テ總益金中ヨリ控除スヘキモノハ法律ニ於テ之ヲ限定スルヲ以テ該條項ニ掲クルモノノ外之ヲ控除スルコトヲ得タルモノトス現今會社ノ損益計算書中ニ於テ往往見ル所ノ役員賞與金及ヒ器械建物船舶等ノ償却金ナルモノハ之ヲ控除スヘキモノナルヤ否ヤニ關シテ世間種種ノ論議アルカ如シト雖モ予ハ何故ニ此ノ如キ論議ヲ生シタルヤヲ解スルコト能ハス前年度繰越金保險責任準備金所得税ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金及ヒ所得税法施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債社債ノ利子ヲ除ク外ハ法律カ總益金中ヨリ控除スヘシト爲ス所ノモノハ獨リ總損金アルノミアルヲ以テ役員賞與金又ハ器械建物船舶等ノ償却金ハ之ヲ總益金中ヨリ控除スヘキモノナルヤ否ヤヲ定

メントセハ一ニ此ノ如キ種類ノ金額ハ損金ナルヤ否ヤニ依リテ之ヲ判セサルヘカラス會社ニシテ利益ノ有無ニ拘ラス一室ノ條件ヲ具備セタル者ニハ必ス賞與金ヲ與フヘキコトヲ定メタル場合ニ於テハ賞與金ノ支拂ハ當初ヨリ會社ノ義務ニ屬シタルモノト謂ハサルヘカラス之ニ反シテ會社ニ於テ利益アリタル場合ニ限リ一定ノ條件ヲ具備シタル者ニ賞與金ヲ與フヘキコトヲ定メタル場合ニ於テハ會社ニ於テ決算上利益アリタル場合ニ於テ始メテ其一部ヲ役員ニ分配スルモノナルカ故ニ其金額ハ之ヲ損金ト謂フコト能ハス隨テ之ヲ益金中ヨリ控除スヘキモノニアラス而シテ賞與金カ損金トシテ支拂ハルモノナルヤ將テ利益ノ分配トシテ支拂ハルモノナルカハ事實ノ問題ニ屬スルカ故ニ各場合ニ就テ之ヲ判断セサルヘカラスト雖モ定款ノ規定又ハ總會ノ決議ニ於テ利益ノ比率ヲ以テ賞與金ヲ定ムルカ如キ場合ニ於テハ其實與金ハ常ニ利益ノ分配ナリト見テ誤ナシト信ス器械建物船舶等ノ償却金ニ至リテモ亦二様ノ觀察ヲ爲ササルヘカラス器械建物船舶等ノ修繕又ハ新造ノ爲メ現ニ之カ修

總費又ハ新造費ヲ支出シタルトキハ之ヲ損金ト見ルヘキハ論ヲ竣タスト雖モ  
 將來ニ於テ減價又ハ滅失ヲ生ズルコトアルヘキヲ豫想シ其場合ニ應スル準備  
 トシテ利益金中ヨリ別途ノ計算ニ移シタル金額ハ會社ニ於テ現ニ支出シタル  
 ニアラズ又之ヲ支出スヘキ義務アルニモアラザルカ故ニ名クテ償却金ト稱ス  
 ト雖モ其實一種ノ積立金ニシテ損金ニアラス故ニ此ノ如キ金額ハ總益金中ヨ  
 リ控除スルコトヲ得サルモノナリ  
 其事業年度ノ所得ニ對スル所得稅ハ之ヲ其年度ノ損金トシテ益金中ヨリ控除  
 スヘキヤ否ヤニ付テモ亦世間ニ議論アルモノニ似タリ然レトモ所得稅ナルモ  
 ノハ法人ノ各事業年度ニ於ケル所得ニ賦課スルモノニシテ所得ハ年度經過ノ  
 後損益ヲ決算シテ始メテ確定スルモノナルヲ以テ所得稅ヲ納ムヘキ義務ハ年  
 度經過後ニ於テ始メテ生ズルモノナリ故ニ所得稅ハ其年度ニ於ケル損金ニア  
 ラズ隨テ之ヲ其年度ノ益金中ヨリ控除スヘキモノニアラス但シ所得稅ノ納付  
 ハ法人ノ義務ニ屬スルモノナルカ故ニ翌年度ニ於テ損金トシテ其  
 損益計算ニ加フヘキハ勿論ナキ事也

所得稅法施行地ニ本店ヲ有スル法人ノ所得ニ關スル說明ヲ終ルニ臨ミ茲ニ一  
 言ノ以テ附加スル所ナカレヘカラサレモノアリ即チ所得稅法第四條第一項第  
 一號ニ規定スル所ハ法人ノ所得ニ付テハ法律ノ意ハ一ニ其各事業年度ニ於ケ  
 ル損益計算ノ結果ニ依ルニ在ルコト是ナリ故ニ法人ニ於テ現ニ費用ヲ支出セ  
 ルコトアルモ損益計算ニ何等ノ影響ヲ及ボサザル場合ニ在リテハ其費用ハ之  
 ヲ見シテ所得稅ノ賦課ヲ爲スヘキモノナリ法人ニ依リテハ一定ノ目的ヲ以  
 テ諸種ノ準備金ヲ積立ツルモノアリ此ノ如キ法人カ一定ノ事實ノ發生シタル  
 ニ際シ其目的ノ爲メニ積立テタル準備金ヨリ之ニ要スル費用ヲ支出シタル場  
 合ニ於テハ其法人ハ現ニ費用ノ支出ヲ爲スモノニシテ而モ之カ爲メニ其準備  
 金ハ減少スルニ至ルモノナリト雖モ之カ計算ハ或ハ單ニ準備金勘定アル特別  
 勘定ニ於テノミ之ヲ明ニシ損益計算書ニハ全ク之ヲ記載セザルコトアリ或ハ  
 之ヲ損益計算書ニ記載スルコトアルモ其記載タルヤ一方ニ於テ受入ヲ爲スト  
 同時ニ他方ニ於テハ拂出ヲ爲シ以テ受拂ノ跡ヲ明カニスルニ止アリ計算ノ結果  
 ニ於テハ何等ノ損益スル所ナキモノトス而シテ所得稅ハ此ノ如クシテ得タル



損益計算ノ結果ヲ標準トシテ之ヲ課スルモノナルカ故ニ結局準備金ヨリ支出シタル金額ハ所得稅ヲ課スル上ニ於テハ自ラ之ヲ見ケルコトト爲ルモノナリ此ノ如キハ一見稍ヤ穩當ヲ缺クカ如シト雖モ深ク事理ヲ存スル所ヲ研究スルトキハ少シモ怪シムニ足ラザルノ事ト爲ス蓋シ法人カ決定ノ目的ヲ以テ準備金ヲ設ケル所以ノモノハ普通ニ生スヘキ經費以外ニ於テ平時ニ往スル費用ハ之ヲ準備金ナル特別勘定ノ負擔トシ以テ各事業年度ノ損益計算以外ニ置カントスルノ趣旨ニ出テタルモノト謂ハサルヘカラサルカ故ニ準備金ヨリ支出シタル金額アルノ故ヲ以テ損益計算ノ結果タル利益ヲ減セサルハ正シク法人カ準備金ナルモノヲ設ケタル所以ノ趣旨ニ通スルモノナリ而シテ法人ハ準備金ヨリ支出シタル金額アルニ拘ラス損益計算ノ結果タル利益ヲ以テ其年度ノ利益ナリトシテ配當スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ所得稅モ亦其利益ヲ標準トシテ之ヲ課スヘキコト事ノ當ニ然ルニキモナリト謂ハサルヘカラズ

乙 所得稅法施行地ニ本店ヲ有セサル法人ノ所得 所得稅法施行地ニ本店ヲ有セサル法人ハ原則トシテハ納稅ノ義務ヲ有ス唯例外トシテ同法施行地ニ

於テ資産又ハ營業ヲ有スル場合ニ限リ其資産又ハ營業ヨリ生スル所得ニ付テシテ所得稅ヲ納ムヘキモノナルコト既ニ述ヘタル所ノ如シ故ニ其所得ノ計算ニ關シテモ亦法律ハ各事業年度該資産又ハ營業ヨリ生シタル益金中ヨリ之ニ關シテ生シタル損金ヲ控除スヘキモノト爲シタリ而シテ本店ニアラザル場所ニ於テハ繰越金又ハ準備金ノ存スヘキコトハアルヘカラサルノ事ナルカ故ニ法律ハ之ヲ揭ケスト雖モ所得稅ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金又ハ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債社債ノ利子ハ或ハ之レ有ルコトナキニアラザルヲ以テ益金中此ノ如キ金額アルトキハ之ヲ除キタルモノヲ以テ益金ト爲スヘキハ所得稅法施行地ニ於テ本店ヲ有スル法人ニ付テ説明シタル所ト異ナル所ナシ

二 第二種ノ所得

第二種ノ所得即チ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債社債ノ利子ニ付テハ法律ハ別ニ收支ノ計算ヲ爲サス其支拂ヲ受ケタル金額ヲ以テ直チニ所得稅ヲ課スヘキ標準ト爲シタリ蓋シ公債社債ノ權利者トシテ之ヲ利子ヲ受ケタル者ハ

之カ爲メニ何等ノ費ス所アルモノニアラスト謂フモ殆ト不可ナキモノナルカ  
 故ニ直チニ總所得ヲ以テ課稅標準ト爲シタルナリ  
 三 第三種ノ所得 第三種ノ所得ノ計算方法ヲ說明スル前ニ於テ先ツ其第一種及ヒ第二種所得ノ計  
 第三種ノ所得ノ計算方法ヲ說明スル前ニ於テ先ツ其第一種及ヒ第二種所得ノ計  
 算方法ト對照シ以テ其異ナル所ヲ明カニスルハ決シテ無用ノ業ニアラサルヘ  
 シ此二者ノ同シカラサル主要ナル點ハ凡ソ左ノ二項ニ於テ存スルモノトス  
 (イ) 第三種ノ所得ハ豫算ヲ以テ之ヲ定ム 第一種及ヒ第二種ノ所得ハ既ニ取  
 得シ又ハ將ニ取得セントスル確定ノ收入ニ依リ之ヲ計算スルモノナリト雖モ  
 第三種ノ所得ハ之ニ反シ既ニ取得シタル收入及ヒ將來ニ取得スヘキ收入ヲ合  
 シ見積ニ依リ之ヲ豫算スルモノナリ  
 (ロ) 第三種ノ所得ハ年額ヲ以テ之ヲ定ム 第一種ノ所得ハ每事業年度ノ利益  
 ニ依リ第二種ノ所得ハ期間ニ拘ラス現ニ支拂ヲ受タル金額ニ依ルヘキモノナ  
 リト雖モ第三種ノ所得ハ之ト異ナリ曆年毎ニ之ヲ計算スヘキモノナリト雖モ  
 第三種ノ所得ノ第一種及ヒ第二種ノ所得ト其計算方法ヲ同シカセザルコト左

ヲ如シ而シテ所得稅法第四條第一項第三號ニ依レハ第三種ノ所得ハ總收入金額  
 ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル豫算年額ニ依ルヘキモノナリ故ニ毎年ノ所得ヲ  
 豫算スルニハ其年ニ取得スヘキ總收入金額ヲ見積リ其中ヨリ之ヲ取得スルニ  
 付キ要スヘキ經費ヲ控除シテ之ヲ計算スヘキモノトス法律ハ總益金ト言ハス  
 シテ總收入金額ト言ヒタルヲ以テ現ニ收入シタル又ハ將來收入スヘキ金額ノ  
 ミヲ指稱スルモノト謂ハサルヘカラス隨テ財產ノ増價ヨリ生スル差益ノ如キ  
 ハ之ヲ合マヌ又總損金ト言ハスシテ經費ト言ヒタルヲ以テ之ヲ現ニ支出シタ  
 ル又ハ將來支出スヘキ金額ノ意義ニ解セザルヘカラス故ニ財產ノ減價ヨリ生  
 スル差損ノ如キハ之ヲ包含セザルモノトス而シテ經費ニ關シテハ法律ハ特ニ  
 「必要ノ經費」ト規定シタルノミナラス所得稅法施行規則第一條ハ總收入金額ヨ  
 リ控除スルヘキ經費トシテ種苗蠶種肥料ノ購買費家畜其他ノ飼養料仕入品ノ原  
 價原料品ノ代價場所物件ノ修繕費其借入料場所物件又ハ業務ニ係ル公課雇人  
 ノ給料等ヲ例示シ其他其收入ヲ得ルニ必要ナルモノニ限定シタルヲ以テ其收  
 入ヲ得ルニ直接必要ナルニアラサル費用ハ之ヲ控除スヘキモノニアラス生活

費其他家事上ノ費用ハ各人必要ノ經費ナリト雖モ之ヲ以テ收入ヲ得ルニ直接必要ナル經費ナリト謂フコト能ハサルガ故ニ所得稅法ノ所謂所得ノ計算ニ於テハ之ヲ控除スルコトヲ得ス各人ノ納ム所得稅又ハ生活遊興費ハ爲メニ生シタル負債ノ利子ノ如キモ亦然リ所得稅法施行規則第一條但書ハ更ニ一歩ヲ進メ家事上ノ費用ト關聯スル費用モ亦之ヲ控除スヘカヲナルコトヲ定メタリ蓋シ家事上ノ費用ト關聯スルモノニ關シテハ其金額ヲ控除スルコトトセハ法律ノ規定ニ反スルコトト爲ルヘク其收入ヲ得ルニ必要ナル部分ノミヲ控除セントセハ此ノ如キ部分ハ殆ト之ヲ知ルニ途ナキヲ以テ已ムヲ得ス此ノ如ク規定シタルモノナルヘシ故ニ家事用ニ兼用スル場所物件ノ修繕費借賃公課又ハ家事用ニ兼用スル雇人ノ給料食料ノ如キモノハ收入金額中ヨリ控除スヘキモノニアラサルナリ

他人ヨリ借入レタル金錢ヲ以テ營業ヲ爲シ又ハ之ヲ以テ土地家屋ヲ取得シテ他ニ貸貸スルカ如キ場合ニ於テ其負債ノ利子ハ所得ノ計算上之ノ經費トシテ控除スルコトヲ得ルモノナリ此問題ニ對シテハ負債ノ利子ハ其營業又ハ貸

貸ニ關シ直接必要ナル經費ニアラサルコトヲ疑フ者ナリト雖モ予バ之ヲ以テ其營業又ハ貸貸ヨリ生スル收入ヲ得ルニ必要ナル經費ナリト斷言シテ憚ラズル者ナリ何トナレハ他人ヨリ借入レタル金錢アリタルニ由リ始メテ營業又ハ貸貸ヲ爲スコトヲ得ルニ至リタルモノナルカ故ニ其借入レタル金錢ノ利息ヲ支拂フコトハ則チ繼續シテ其營業又ハ貸貸ヨリ收入ヲ得ル所以ノ起因タルヲ以テナリ

以上説明スル所ハ第三種ノ所得計算ニ關スル原則ナリ此原則ニ對シテハ二箇ノ例外アリ此例外ヲ設クルノ要否ハ予之ヲ論スルヲ欲セス茲ニハ唯法律ノ規定ニ本ツキ之カ説明ヲ爲サンノミ

例外ノ一 左ニ掲タル收入ハ其豫算年額ヲ以テ直ニ所得トシ別ニ經費ノ控除ヲ爲サス所得稅法第四條第一項第三號但書前段蓋シ該收入中ニハ之ヲ得ルカ爲メ殆ト經費ヲ要セサルモノアリ其之ヲ要スルモノト雖モ其額タル比較的多カラサルヲ常トスルヲ以テ之ヲ控除キスルニ所得稅ヲ課スルモ甚シク不公平ナル結果ヲ生スルモノニアラス故ニ法律ハ此ノ如キ收入ハ直チニ之ヲ以テ所

得ト爲シ以テ計算ヲ煩ラ除クテ便ト爲シタルナリトテ法人ハ通ニ以テ所得ト爲シ以テ計算ヲ煩ラ除クテ便ト爲シタルナル公債社債ノ利息  
 (イ) 所得税法施行地ニ於テ支拂テ受ケタル公債社債ノ利息  
 (ロ) 營業ニ非ナル貸金ノ利息  
 (ハ) 預金ノ利息  
 (ニ) 所得税法ニ依リ所得税ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケル配當金  
 (ホ) 俸給  
 (ヘ) 給料  
 (ト) 手當金  
 (チ) 割賦賞與金  
 (リ) 歳費  
 (ヌ) 年金  
 (ル) 恩給金

右ニ舉ケタル各種目ハ一見甚タ明瞭ニシテ特ニ説明ヲ爲スノ要ナレト雖モ唯手當金ニ付テハ世間往來議論アルモノノ如クナルヲ以テ計算ニ關スル説明ヲ

爲スノ機會ヲ以テ之ニ關シテ一言ヲ費サントス蓋シ世間ノ議論ナルモノヲ見ルニ多クハ名ケテ手當金ト稱スルモノノミヲ以テ所得税法ノ所謂手當金ナルモノニ擬セントスルニ似タリト雖モ所得税法第四條中ニ規定スル手當金ナルモノハ收入ノ實質ニ付テ之ヲ言フモノニシテ其名稱如何ニ依リテ之ヲ言フモノニアラス故ニ如何ナル名稱ヲ用フルモ其實質ニシテ手當ノ性質ヲ有スルモノハ總テ之ヲ手當金ナリト謂ハサルヲ得ス是レ猶ホ月給ト稱シ給金ト稱スルモ苟モ給料ノ性質アルモノハ共ニ之ヲ給料ナリト謂ハサルヘカラサルカ如シ彼ノ名譽町村長ノ受ケル報酬又ハ軍人ノ受ケル宅料馬飼料ノ如キモノハ其名稱ハ手當金ト言ハスト雖モ其實質ハ一種ノ手當ニ過キナルヲ以テ所得税法ノ適用トシテ之ヲ以テ手當金ナリトシ其全額ヲ以テ直チニ所得ト爲ササルヘカラス

例外ノ二 田畑即チ耕地ヨリ生スル所得ハ前三箇年間所得平均高ヲ以テ算出スヘキモノナリ所得税法第四條第一項第三號但書後段予ハ特ニ耕地ナル註解ヲ加ヘタリ何トナレハ地租條例其他ノ法令ニ於テ稱スル田畑ナルモノハ耕地

ニ限ルモノニシテ鹽田之ヲ田井謂フ以テナリ法律カ田畑ニ限  
 リ前三箇年間ノ所得平均高ヲ以テ其年ノ所得ヲ算出スヘキモ其年ノ所得ノ計算ニ於  
 田畑ノ收穫ハ年ニ依リ豐凶ケルヲ免セサルヲ以テ相當年間ノ平均ニ依リテ其  
 平準ヲ得ンコトヲ期シタルナルヘシ

「前三箇年間所得平均高ヲ以テ算出スヘキ」其意義頗ル明瞭ヲ缺ク故ニ之ニ  
 對シテハ二様ノ見解ヲ下ス者アルニ似タリ正當ニ當テズルモノモ限外ニ於テ  
 甲說ニ所得者カ前三箇年間其所有田畑ノ所得タル所得ヲ各年ニ定テ單位ニ於  
 テ平均シ更ニ之ヲ三箇年ニ平均シ之ヲ以テ其年現ニ所有スル田畑全體ニ對ス  
 ル所得額ヲ算出スヘキモノナリ例ヘハ前三箇年中初年ハ田五町步ヲ所有シ三百  
 圓ノ所得ヲ得次年ニハ四町五反步ヲ所有シ三百十五圓ヲ所得シ得第三年ニハ  
 六町步ヲ所有シ三百九十圓ノ所得ヲ得タル者其年ノ現ニ田七町步ヲ所有スル  
 トキハ一反步當所得初年六圓次年七圓第三年六圓五十錢ノ平均高六圓五十錢  
 ヲ以テ七町步ニ對スル所得額ヲ算出シ其年ノ所得額四百五十五圓ト爲スヘキ  
 カ如シ反別ノ標準トセス地價又雪小作料其他何等ノ標準ニ依ルモノ其計算ノ理

ハ則チ一ナリ法律カ「前三箇年間所得平均高ニ依ル」ト言ハスシテ「前三箇年間所  
 得平均高ヲ以テ算出スヘシ」ト言ハタルハ其意平均高ヲ以テ直ニ其年ノ算  
 額ト爲スニ在ラスシテ平均高ヲ以テ更ニ其年ノ所得額ヲ算出スルニ在ルモノ  
 ト謂ハサルヘカラス而シテ其年ノ所得額ヲ算出スト斷言シ其斷言ヲ以テ相當  
 ノ意義ヲ有セシメントセハ所得稅第四條第一項第三號但書後段ハ所得者カ  
 前三箇年間ニ所有シタル田畑所得ノ結果ヲ以テ其年ニ所有スル田畑所得ヲ豫  
 算スルノ趣旨ニ出ラタルモノト爲ササルヲ得ス若シ然ラスシテ現ニ所得ノ見  
 積ヲ爲サントスル田畑其物ノ前三箇年間ノ所得ニ依リ其年ノ所得ヲ豫算スル  
 ノ意ナリトセム平均高ヲ以テ算出ストハ無意義ノ法文ト爲ルニ至ルヘシ加之  
 ノ技術上ノ利益ハ土地ノ肥瘠ニ依リテ差違アルハ勿論ナリト雖モ而モ亦耕作者  
 ス唯土地其物ニ付テハ前三箇年間ニ生シタル利益ヲ問ハシトスルハ之ヲ所  
 得ヲ豫算スルヲ良法ナリト謂フコト能ハス特ニ或人ノ所得ヲ計算スルニ當リ  
 他人ノ所得ヲ計量セサルヘカラスカ如キハ其煩タル殆ト覺ユルコト能ハナ

ルヘシ法律ハ豈ニ此ノ如キノ意ヲ以テ規定セラレタルモノナラシヤ  
 乙說 何人ノ所有ニ屬シタル田畑ヲ問ハズ現ニ所得ノ見積ヲ爲サントスル田畑其  
 物ニ付キ前三年間ニ生シタル利益ニ依リ之ヲ平均シテ其年ノ所得ト爲スヘ  
 キモノナリ例ヘハ某所ニ於ケル田地カ前年及ヒ本年ニ於テハ甲ニ屬スト雖モ  
 其以前ニ於テハ乙ノ所有ナリシ場合ニ於テ本年甲ノ所得ヲ豫算スルニ當リテ  
 ハ其田地ニ付テハ前三年間ニ於テ所有者ノ乙ナリシト將タ甲ナリシトヲ問  
 ハス其間其土地ヨリ生シタル利益ヲ平均シテ之カ所得額ヲ定ムヘキモノトス  
 法律カ前三年間所得平均高ヲ以テ算出スヘシト規定シタルハ用語稍ヤ不精  
 密ナリト雖モ其意ハ三年間ノ所得平均ヲ算出シ之ヲ以テ其年ノ所得ト爲スヘ  
 シト謂フニ在リ若シ強テ平均高ヲ以テ算出スヘシト爲シタル文字ニ重キヲ置  
 ヲ所得者ノ既往三年間ニ有シタル田畑ノ所得ヲ以テ其現ニ有スル田畑ノ所得  
 ヲ推サントモハ其所有地ニ變更アリタル場合ニ於テハ上田ノ所得ヲ以テ下田  
 ヲ推シ下田ノ利益ヲ以テ上田ヲ律スルコトト爲リ其不衡平ナル測ルヘカラス  
 論者ハ田畑其物ノ前三年間ニ於ケル利益ヲ見ントモハ時トシテ他人ノ所得ヲ

計量セザルヘカラスシテ其類ニ堪ヘスト爲スト雖モ土地ノ如キ不動ナルモノ  
 ノ所得ハ他ノ所得ト異ナリ他人ノ利益ヲ計量スルコト甚シク困難ナルモノニ  
 アラサルカ故ニ論者ノ想像スルカ如キ類アルニアラス故ニ所得稅法第四條第  
 一項第三號但書後段ノ規定ハ所得ノ見積ヲ爲サントスル田畑其物ノ前三年  
 中ニ於ケル所得ヲ見ルノ趣旨ナリト解セザルヘカラス  
 予ハ甲乙兩說共ニ之ヲ取ラス甲說ニ依レハ所得者ノ前三年間ニ所有シタル  
 田畑ノ所得ヲ以テ其年現ニ所有スル田畑ノ所得ヲ推算スヘキモノナリト爲ス  
 ト雖モ所得稅法第四條第一項第三號但書後段ノ規定ニ依リテ年ニ依リ豊凶ア  
 ルヲ免レサル田畑ノ所得ヲシテ相當年間ノ平均ニ依リ標準ヲ得セシメント  
 スルニ在リトモハ其可否ハ暫ク之ヲ措キ土地其物ノ收穫ニ依リテ標準ヲ計ル  
 ニアラサレハ其趣旨ヲ貫徹スルコト能ハス又乙說ニ依レハ田畑カ他人ニ屬シ  
 タル時ノ利益ヲ平均計算ニ加フヘシト論スト雖モ所得トハ各人ノ利益  
 ヲ主觀的ニ觀察セタルモノナルカ故ニ單ニ所得ヲ計算スルコトヲ定ムル法文  
 ヲ解シ他人ノ所得ヲ加ヘテ計算スヘキモノナリト謂フハ解釋ノ當ヲ得タルモ

ノニアラス予ヲ以テ之ヲ見ルニ所得税法第四條第一項第三號但書後段ノ規定ハ田畑ヲ所有スル者ノ田畑ヨリ得ル所得ヲ計算スル場合ニ於テ其田畑中四年前ヨリ引續キ所有スルモノアルトキニ於テ始メテ之ニ適用セラルヘキモノニシテ此ノ如キ場合ニ於テハ其所得ハ前三年間ノ所得ヲ平均シテ其年ノ所得ト爲スト謂フニ在ルモノナリ而シテ該規定ノ適用セラルルハ此場合ニ限ルモノニシテ其他ニハ及フモノニアラス元來該規定ハ例外ノ規定ニ屬スモノナラカ故ニ之ヲ嚴格ニ解釋スルコトヲ要シ該規定ノ適用ヲ受ケタル場合ニ於テハ常ニ原則ニ復歸シ其適用ヲ爲ササルヘカラス故ニ左ノ場合ニ於テハ其田畑ノ所得ハ其年ノ現況ニ依リ年額ヲ豫算シテ之ヲ定ムヘキモノナリ

(イ) 所得者ノ所有スル田畑中前三年間引續キ所得者ニ屬セザルトキ

(ロ) 所得者ノ所有ニ係ル田畑ニシテ前三年間引續キ所得者ニ屬シタルモ田畑トシテノ所得ナカリシトキ即チ其田畑ハ前三年間ニ於テ田以外ノ地目ナラシメシコトアルトキ

(ハ) 所得者ノ所有ニ係ル田畑ニシテ前三年間引續キ所得者ニ屬シタルモ畑トシテノ所得者ノ所有ニ係ル畑ニシテ前三年間引續キ所得者ニ屬シタルモ畑ト

第三種ノ所得ナカリシトキ即チ其畑ハ前三年間ニ於テ畑以外ノ地目ナラシメシコトアルトキ

第三種ノ所得ニ關スル計算ハ其原則タルト例外タルトヲ問ハス年額ヲ豫算スヘキモノナルコト以上述フル所ノ如シ而シテ豫算ナルモノハ之ヲ爲ス時ノ如何ニ依リ其見積ヲ異ニスヘキモノナルヲ以テ豫算年額ニ依ル以上ハ必ス之カ豫算ヲ爲スヘキ時ヲ定メサルヘカラス所得税法施行規則ハ之ヲ定メ申告調査又ハ決定當時ノ現況ニ依ルヘキモノト爲シタリ(所得税法施行規則第二條即チ申告ヲ爲サントスル者ハ申告ノ當時調査ヲ爲ス者ハ調査ノ當時決定ヲ爲サントスル者ハ決定當時ノ現況ニ依リ所得税法第五條ニ該當スル所得即チ所得税ヲ課セザル所得ヲ除キ第三種ノ所得ヲ算出スヘキモノトス故ニ申告調査又ハ決定當時ニ於テ既ニ收入又ハ支出シタルモノ及ヒ收入又ハ支出スヘキコト確定シタルモノハ其實額ニ依リ其時ノ現況ニ依リ將來收入又ハ支出スヘキモノハ其見積額ニ依リテ所得ヲ算出シ二者ヲ合シタルモノヲ以テ其年ノ所得額ト爲スヘキモノナリ豫算ノ時期ヲ一定セスシテ時ノ現況ニ依ルコトヲ得セシメ

タルハ豫算金額ヲシテ成ルヘク實額ニ近キモノトスルノ趣旨ニ出テタルモノニシテ課税ノ衡平ヲ計ルニハ最も適シタルモノト謂ハサルヘカラス  
 所得税法第五條ニ該當スル所得ヲ除ク場合ニ於テ所得ノ性質ニ依リ所得税ヲ課セスト爲シタルモノニ在リテハ其年額ヲ除クヘキハ勿論ナリト雖モ所得ノ性質ニ依ラス單ニ或條件ヲ具備スル間ニ限リ所得税ヲ課セスト爲シタルモノ例ヘハ從軍中ノ俸給ノ如キモノニ在リテハ如何ニ之ヲ見積リテ控除スヘキモノナルヤ豫算ヲ爲ス當時ニ於テ既ニ從軍事故ノ消滅シタルモノニ在リテハ其從軍中ニ於ケル俸給ノミヲ除クヘキコト論ヲ須タズト雖モ其當時尙ホ從軍事故ノ繼續スルモノニ在リテハ其年中ハ從軍ノ解除スルコトナキモノト爲シ殘日數ニ對スル俸給ハ總テ之ヲ除クヲ以テ相當ト爲スヘシ何トナレハ豫算當時ノ實況ハ現ニ從軍中ナルカ故ニ其現況ニ依リ豫算スルモノトセハ從軍事故ハ解除スルモノト見ルヨリハ寧ろ繼續スルモノト見ルコト事實ニ近キノ推定ト爲スヘキヲ以テナリ

第三種所得ノ計算ニ關スル說明ヲ終ルニ臨ミ一ノ問題ヲ解決セサルヘカラス

即チ所得ヲ豫算ストハ其年ニ於テ現ニ收入シ又ハ支出スヘキ金額ニ依リ其收支ノ差引利益ヲ見積ルノ意ナルヤ將タ其年ニ於テ收入シ又ハ支出スヘキ權利額又ハ義務額ニ依リ其收支ノ差引利益ヲ見積ルノ意ナリヤノ問題はナリ例ヘハ貸金預金ノ利子ノ如ク貸付又ハ預入ノ存續スル間日割ヲ以テ發生スル權利ニシテ其辨濟期日其年ニ在ラサルトキハ其利子ハ之ヲ其年ノ所得ニ計算スルコトヲ得ルヤ否ヤ若シ所得ノ豫算ヲ以テ現實ノ收支額ニ依ルヘキモノトセハ權利義務ハ其年ニ於テ發生スルモ其履行ノ期日ニシテ其年ニ在ラサルモノハ之ヲ計算中ニ加フルコトヲ得サルヘシ之ニ反シテ權利義務ノ差引額ニ依ルヘキモノトセハ苟モ權利義務ニシテ其年中ニ發生スヘキモノナル以上ハ其履行期日ハ其年ニ在ラサルモノ之ヲ以テ其年ノ所得中ニ計算セサルヘカラス予リ以テ之ヲ見ルニ各人ノ權利ハ其發生ノ時ニ於テ其人ノ利益ト爲リ其義務モ亦其發生ノ時ニ於テ其人ノ損失ト爲ルヘキモノナルカ故ニ收支計算即チ損益計算ノ結果タル所得ナルモノハ權利義務發生ノ時ニ於テ之ヲ見ルヘキモノニシテ權利義務履行ノ時ニ於テ之ヲ見ルヘキモノニアラサルナリ故ニ前例ニ於ケル



貸金預金ノ利子ノ如キハ貸付預入ノ存續期間ニ應シ日割ヲ以テ各年ノ所得ヲ豫算スヘキモノニシテ其辨濟期日ノ何レノ年ニ在ルカハ間フヘキ所ニアラスト謂ハサルヘカラス特ニ此ノ如キ解釋ヲ取ラサルトキハ計算上利益ヲ得ルコト明カナル者ト雖モ現物ノ引渡ヲ爲ササルコトヲ定ムルトキハ常ニ無所得者トシテ巧ニ所得稅ノ賦課ヲ免ルルコトヲ得ルニ至ルヘシ予ハ法律カ此ノ如キ租漏ナル結果ヲ認容シテ規定セラレタルモノナルコトヲ信スル能ハサルナリ

第三 所得ノ確定

第二種ノ所得ハ納稅者カ利子トシテ現ニ支拂ヲ受クル金額ニ依ルヘキモノニシテ而モ其支拂ノ際之カ所得稅ヲ控除シテ徵收スルモノナルヲ以テ其所得金額ノ若干ナルキハ極メテ明白ノ事實ニシテ豫メ之ヲ確定シテ納稅者ニ知悉セシムルカ如キ必要ナシト雖モ第一種及ヒ第三種ノ所得ニ至リテハ之ヲ知ルコト此ノ如ク容易ナルモノニアラス一ニ損益ノ計算又ハ收支ノ豫算ノ結果ニ依ラサルヘウラサルカ故ニ其金額ハ納稅者ノ主張スル所常ニ必スシモ政府ノ見

ル所ト一致スルモノニアラス故ニ稅金ノ徵收ヲ爲ス前ニ於テ先ツ其標準タルヘキ所得金額ヲ確定セサルヘカラス所得稅法ハ其手段トシテ先ツ所得金額ノ届出ヲ爲サシメ調査決定ノ後之ヲ通知シ以テ納稅者ヲシテ豫メ其納ムヘキ稅額ノ若干ナルヤヲ知ラシムルト同時ニ不服ノ點ニ付キ異議ヲ主張スルノ機會ヲ得セシメタリ

一 所得金額ノ届出

法律カ所得金額ノ届出ヲ必要トシタルハ政府ノ知ラサル所ニ於テ納稅義務者ノ漏ルルアルヲ防クト同時ニ政府ノ專擅的認定ニ對シ納稅義務者ヲシテ豫メ其相當トスル所ヲ告白スルノ便利ヲ有セシメントスルノ趣旨ニ出テタルモノナリ

甲 第一種ノ所得 納稅義務アル法人ハ各事業年度毎ニ損益計算書ヲ所轄稅務署ニ提出スルノ義務ヲ有ス(所得稅法第七條)所得稅法施行規則第三條)所得稅法施行規則第三條ハ每事業年度通常總會後七日以内ニ損益計算書ヲ提出スヘキコトヲ定ムルヲ以テ株式會社及ヒ株式合資會社ノ如ク定時總會ヲ開クヘキ

モノニ在リテハ其總會後七日以内ニ之ヲ提出セサルヘカラスト雖モ合名會社  
 合資會社ノ如ク法律上定時總會ヲ開クヘキコトヲ定メタルモノニ在リテ若シ  
 毎事業年度一定ノ時期ニ於テ總會ヲ開カサルトキハ損益ノ決算ヲ爲シタル後  
 相當ノ期間内ニ於テ之ヲ提出スヘキモノナリ

乙 第三種ノ所得 第三種ノ所得ニ付キ納稅義務アル者ハ毎年四月中ニ所得  
 ノ種類、金額及ヒ其計算ノ本ツテ所ヲ詳記シ所轄稅務署ニ申告スヘキモノトス  
 (所得稅法第八條所得稅法施行規則第四條第一項同居者ニテ所得金額ノ合算  
 額ニ依リ所得稅率ヲ定メラルヘキ者ニ在リテハ同時ニ其申告ヲ爲スコトヲ要  
 ス)所得稅法施行規則第四條第二項蓋シ同時ニ申告セシムルトキハ當該官吏ヲ  
 シテ容易ニ其所得金額ノ合算額ニ依リテ稅率ヲ定ムヘキモノナルコトヲ知ラ  
 シムルノ利益アルヲ以テナリ

二 所得金額ノ調査

甲 第一種ノ所得 第一種ノ所得ハ損益計算ノ結果ニ依リテ之ヲ定ムヘキモノ  
 ナルヲ以テ稅務署長ハ法人ノ損益計算書ニ就キ之ヲ調査スヘキモノナリ所得

稅法第九條前段損益計算書ハ法人ノ損益ヲ明カニスルモノナルカ故ニ別ニ之  
 ヲ調査スル必要ナキカ如クナルニ法律カ仍ホ之ヲ調査スヘキコトヲ命シタ  
 ルハ一見鄭重ニ過タルカ如シト雖モ法人ニ因リテ性質上損金ニアラザルモノ  
 ヲモ損金トシテ計算シ以テ所得稅ヲ免レンコトヲ謀ル者之レ無キヲ保セザル  
 ヲ以テ法律ハ此場合ニ於テモ尙ホ調査ヲ爲スヘキモノト爲シ以テ當該官吏ヲ  
 シテ損益計算書ニ掲上シタル金額ノ正否ヲ檢セシムルト同時ニ其計算ノ當否  
 ヲ判セシメ之ニ依リテ課稅標準ノ的確ヲ期シタルナリ

納稅義務アル法人ハ損益計算書ヲ提出スヘキコトハ既ニ述フル所ノ如シト雖  
 モ計算書ハ所得ヲ調査スル材料ニ過キスベテ之ヲ提出セザルモ之カ爲メ其納  
 稅義務ニ影響スルモノニアラス故ニ此ノ如キ場合ニ於テハ當該官吏ハ其職權  
 ノ許ス範圍内ニ於テ相當ノ處置ヲ取リ以テ法人ノ損益ヲ調査スヘキモノトス  
 (所得稅法施行規則第三一條)

乙 第三種ノ所得 第三種ノ所得ニ關シテハ二段ノ調査ヲ爲スヘキモノトス  
 (イ) 稅務署長ノ調査 稅務署長ハ届出ノ有無ニ拘ラス毎年第三種ノ所得ニ付

キ納稅義務アリト認ムル者ノ所得金額ヲ調査シ之カ見積書ヲ調製シテ之ヲ調査委員會ニ送付スヘキモノトス(所得稅法第一〇條)而シテ元來納稅者ノ届出ナルモノハ調査ノ根據ト爲ルヘキモノニアラスシテ單ニ所得決定ノ參考ニ過キタルヲ以テ稅務署長ノ調査シタル所ニ依リ其脱漏又ハ誤記アルコトヲ發見スルモ別ニ之ヲ訂正セザルニ及ハス稅務署長ハ其相當ト認ムル調査書ト共ニ其儘之ヲ調査委員會ニ送付シテ可ナリ

(ロ) 所得調査委員會ノ調査 稅務署長ノ爲シタル所得ノ調査ハ單ニ調査委員會ノ參考ト爲ルニ過キス所得金額決定ノ基礎ト爲ルヘキモノニアラス決定ノ基礎タルヘキ調査ハ實ニ所得調査委員會之ヲ爲ス所得稅法第九條後段ニ依レハ第三種ノ所得ハ所得調査委員會之ヲ調査スヘキモノナルヲ以テ調査委員會ハ其見ル所ニ依リ適宜ニ之ヲ調査シテ可ナリ故ニ便宜上稅務署長ノ調査シタル調査書ヲ原案トシテ會議スルコトアルヘキモ其決議ハ納稅義務者ノ届出又ハ稅務署長ノ調査ニ依リ拘束セララルヘキモノニアラサルナリ然レトモ稅務署長ノ調査ト雖モ既ニ法律ノ命スル所ニ依リテ之ヲ爲シタルモノニシテ而モ法

律カ調査委員會ノ調査ニ先テ第一著トシテ稅務署長ヲシテ各人ノ所得ヲ調査セシメ其意見ヲ提出セシムル所以ノモノハ之ニ依リテ調査委員會ノ決議ヲ以テ遺憾ナキノ域ニ至ラシメントスルニ在ルモノト謂ハサルヘカラス隨テ稅務署長ハ調査委員會ニ於テ其調査ヲ説明シ又ハ之ヲ主持シ以テ二段ノ調査ヲ爲ス所以ノ趣旨ヲ達スルコトヲカムルノ權能ヲ有セサルヘカラス故ニ法律ハ稅務署長又ハ其代理官ヲシテ調査委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得セシメタリ(所得稅法第三二條)而シテ此ノ如クシテ調査委員會ニ於テ決議シタル結果ハ會長ヨリ之ヲ稅務署長ニ通知セサルヘカラス(所得稅法施行規則第一二條)第三種所得ノ調査ニ關シテハ其稅務署長ノ行フモノニ係ルト將テ調査委員會ノ爲スモノニ係ルトヲ問ハス宜シク所得ノ實額ヲ得ンコトヲ期セサルヘカラス所得ノ計算ニ關シテハ既ニ述フル如ク法律ニ於テ之カ規定ヲ設クト雖モ是レ唯大體ニ於ケル原則ヲ示シタルノミ元來第三種ノ所得ハ豫算ヲ以テ之ヲ定ムルモノナルカ故ニ現實ノ收支ヲ計算スルカ如ク計算ノ結果ヲミニ依リテ直チニ其實ニ近キモノヲ得ルコト頗ル難キモノナリ故ニ收支計算上ノ些細ノ點

ニノミ取テ置キテ調査ヲ爲ストキハ却テ大體ニ於テハ其實ニ違キノ結果ヲ見ルコト尠カラサルヘシ調査ヲ爲ス者ハ須ラク納稅義務者ノ生活信用、取引等凡ソ人ノ所得ヲ推定シ得ヘキ事實ニ依リテ大體ニ著眼シ常ニ收支計算ノ結果ト達觀上ノ推定トノ近接ニ依リテ所得ノ調査ヲ爲スコトニ留意セサルヘカラス上述ノ如ク所得ノ調査ナルモノハ調査ヲ爲ス者ノ認定ニ依リテ之ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ調査者ハ認定ヲ爲スル材料ヲ得ヘキ便宜ヲ有セサルヘカラス故ニ稅務署長又ハ其代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務アリト認ムル者ニ對シ其所得ニ關スル事實ヲ質問スルコトヲ得ルモノニテ所得稅法第三四條法律ハ獨リ稅務署長及ヒ其代理官ニ限テ右ノ權能ヲ與ヘ調査委員又ハ調査委員會ニ對シテハ之ヲ付與セザリシヲ以テ調査委員ハ自ラ納稅義務アリト認ムル者ニ對シ質問ヲ爲スコトヲ得ス但シ調査委員ニ於テ質問ヲ要スル事項ハ之ヲ稅務署長ニ移付シ之ヲシテ質問ヲ爲サシムルコトヲ得ルカ故ニ實際ニ於テハ調査委員會ト雖モ其必要トスル材料ヲ得ルノ便宜ハ之ヲ有スルモノナリト謂フコトヲ得ヘシハ調査委員ハ其必要トスル材料ヲ得ルノ便宜ハ之ヲ有スルモノナリト謂フ

三 所得金額ノ決定

甲 決定 所得金額ハ第一種ニ在リテハ稅務署長ノ調査シタル所ニ依リ第三種ニ在リテハ調査委員會ノ調査シタル所ニ依リ稅務管理局長之ヲ決定スヘキモノナリ所得稅法第九條所得稅法施行規則第一三條第三一條即チ第一種ノ所得ニ付テハ政府ニ於テ其金額ヲ調査シ政府ノ見ル所ニ依リ之ヲ決定スルモノナリト雖モ第三種ノ所得ニ付テハ調査委員會ニ於テ其金額ヲ調査シ政府ハ其決議ニ依リテ所得金額ヲ決定スヘキモノニシテ普通ノ場合ニ於テハ政府ノ調査委員會ノ決議額ト異ナリタル決定ヲ爲スコト能ハサルモノトス但シ政府ニ於テ調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ再調査ニ付シ調査委員會ヲシテ更ニ相當ナル決議ヲ爲サシムルコトヲ得ルモノナリ所得稅法第三一條前段調査委員會ニ於テ相當ノ調査ヲ爲ストキハ政府ハ其決議ニ依リテ第三種ノ所得ヲ決定スヘキコト右ニ述フル所ノ如シト雖モ調査委員會ニ於テ調査ヲ爲スコト能ハサルカ又ハ相當ノ調査ヲ爲ササルトキハ勢ヒ法律ノ執行者タル政府ニ於テ其見ル所ニ依リ所得金額ノ決定ヲ爲ササルヲ得ス故ニ左ノ場合ニ於テハ

政府ハ其獨斷ヲ以テ所得金額ノ決定ヲ爲スヘキモノトスニテ、  
 (イ) 調査委員選舉ノ不成立又ハ調査委員召集ニ應セザル等其他何等ノ事由ニ  
 因ルヲ問ハス八月三十一日マテニ調査委員會成立セザルカ爲メ調査ヲ爲スコ  
 ト能ハサルトキ(所得稅法第三〇條)  
 (ロ) 調査委員會ハ成立スルモ八月三十一日マテニ調査終了セザルトキ同上但  
 シ此場合ニ於テ調査終了シタルモノニ付テハ政府ハ調査委員會ノ決議ニ依リ  
 テ其所得金額ヲ決定シ唯調査未済ノモノニ限り其見ル所ニ依リ其所得金額ヲ  
 決定スヘキモノナリ  
 (ハ) 政府ニ於テ調査委員會ノ再調査ヲ求メタル場合ニ於テ其再調査ニ於ケル  
 決議仍ホ不當ナリト認ムルトキ(所得稅法第三一條後段)  
 (ニ) 政府ニ於テ調査委員會ノ再調査ヲ求メタル場合ニ政ヲ再調査ニ付シタル  
 日ヨリ十五日以内ニ調査委員會ニ於テ調査ヲ終了セザルトキ但シ此場合ニ於  
 テモ政府ニ於テ決定スルハ調査未済ノ所得金額ニ限ルモノナリ同上  
 (ホ) 所得金額ヲ隱蔽シテ通稅シタル者處罰セラレタルトキ(所得稅法第四六條)

(ハ) 所得金額ヲ隱蔽シテ通稅シタル者自首シタルトキ(同上)  
 (イ) 通知 稅務管理局長第一種又ハ第三種ノ所得金額ヲ決定シタルトキハ之  
 ヲ納稅義務者ニ通知セザルヘカラス(所得稅法第三五條) 所得稅法施行規則第一  
 三條蓋シ所得金額ハ課稅ノ標準タルモノナルカ故ニ納稅義務者ヲシテ之ニ依  
 リテ豫メ其納ムヘキ稅額ノ若干ナルヤヲ知ラシメ負擔ノ準備ヲ爲サシムルノ  
 必要アルノミナラス場合ニ因リテハ其變更ヲ求ムルノ機會ヲ得セシメタルヘ  
 カラサルヲ以テナリ  
 丙 救濟 稅務管理局長所得金額ヲ決定シテ納稅義務者ニ通知シタルトキハ  
 所得金額ハ之ニ因リテ確定スルモノナルカ故ニ其間誤調アリシト雖モ漫ニ  
 之ヲ變更スルコトヲ得ス之ヲ變更スルニハ必ス法律ノ定メタル救濟方法ニ依  
 ラサルヘカラス同一ノ所得ヲ重複ニ計算シ又ハ所得稅法第五條ニ該當スル所  
 得ヲ算入シテ決定ヲ爲シタルカ如キ極端ナル場合ト雖モ尚ホ政府ハ任意ニ其  
 決定シタル金額ヲ變更スルコトヲ得ナルモノナリ(所得稅法施行規則第三二條)  
 故ニ納稅義務者ニシテ政府ノ通知シタル所得金額ニ對シ不服ナルトキ之カ救

請求メントセハ必ス審査請求訴訟行政訴訟ノ三者其一ノ方法ニ依ラザルヘカラス

(イ) 審査請求 審査請求トハ政府ノ決定シタル所得金額ヲ不當トシ事實ヲ審査シ更ニ相當ノ決定アラシムコトヲ請求スルヲ謂フ審査ヲ請求スルニハ所得金額ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ證書類ヲ添ヘ稅務管理局長ニ申出テタルヘカラス(所得稅法第三六條)所得稅法施行規則第一四條而シテ審査請求ニ對シ審査委員會ノ決議ニ依リ更ニ決定ヲ爲スニ至ルツ手續ハ略シテ調査委員會ノ調査ニ依リ所得金額ノ決定ヲ爲ス場合ニ於ケル手續ト相似タルモノナルカ故ニ茲ニハ其說明ヲ省略ス(所得稅法第三七條)所得稅法施行規則第二八條第二九條第三〇條

審査請求ナルモノハ事實ノ再審ヲ求ムルモノナルヲ以テ審査ヲ請求アリタルトキハ審査委員會ハ請求者ノ所得全體ニ付キ更ニ相當ノ調査ヲ爲スヘキモノニシテ其結果既ニ決定シタル金額ヲ實ニ過少ナルトシ發見シタルトキハ之ヲ減額スヘキハ勿論ナリト雖モ事實決定金額ヨリ多額ノ所得ヲ有スルコト明カナ

ルトキハ亦之ヲ増額スルニ於テ何等妨タル所アルモノニアラザルナリ但シ審査ノ結果ニ因リ更ニ所得金額決定セラルルマデハ既ニ通知セラレタル金額ヲ以テ確定ノモノト爲サザルヘシラザルカ故ニ審査ノ結果發表セララルル前ニ於テ納期ノ到來シタル場合ニ於テハ納稅義務者ハ其全額ニ依リテ税金ヲ納メザルヘカラス而シテ審査ノ結果該金額ト同シカラザル所得金額ノ決定アルニ至リタル場合ニ於テハ更ニ追徴又ハ返付ヲ爲スヘキモノトス(所得稅法第三八條)

(ウ) 訴訟 所得金額ハ課稅ノ標準ナルヲ以テ不當ナル標準ニ依リ所得稅ヲ賦課セラレタル場合ニ於テハ之ニ對シ訴訟ヲ爲スコトヲ得ヘキハ訴訟法ニ於テ何等疑ヲ容レザル所ナリト雖モ所得金額ノ決定アリタル場合ニ於テ未ダ所得稅ノ賦課ナキニモ拘ラス其決定ニ對シ訴訟ヲ提起スルコトヲ得ヘキハ否ヤハ訴訟法ニ於テハ頗ル疑ハシキ問題ナリト謂ハナルヘカラス然ルニ所得稅ノ賦課ニ付キ不服ヲ訴フル者ハ賦課ノ手續等ニ付テ異議ヲ申立ツルカ如キハ甚タ稀ニシテ多クハ所得ノ有無又ハ其金額ノ多少ノ點ニ於テ爭アルモノナルヲ以テ所得金額ノ決定通知ニ對シ直接ニ訴訟ヲ提起スルヲ得ト爲スコト不服者ニ對

濟ヲ與ブルニ於テ最モ適スルモノト謂ハサルヲ得ス所得稅法ハ此方針ニ依リ其第三十九條ヲ以テ所得金額ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴願ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨ヲ明言シタリ該條ハ廣ク「所得金額ノ決定ニ對シ不服アル者」規定シ其決定カ調査委員會ノ決議ニ依リテ爲テタルト將テ審査委員會ノ決議ニ依リテ爲テタルトニ依リテ區別セラルカ故ニ孰レノ場合ニ於テモ不服者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得ルモノトス所得稅法第三十九條ノ規定ヲ解キテ單ニ審査委員會ノ決議ニ依リ決定シタル所得金額ニ對シテノミ訴願ヲ許シタルモノト爲スハ理由ナクシテ法文ノ意義ヲ縮小スルモノニシテ解釋ノ當ヲ得タルモノト爲スコト能ハス

(一) 行政訴訟 所得金額ノ決定ニ對シ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得ルコトモ亦所得稅法第三十九條ノ規定スル所ナリ蓋シ不服者ヲシテ現今存スル救濟ノ途ハ總テ之ヲ盡スコトヲ得セシメ以テ遺憾ナカラシムルノ趣旨ニ出ラタルモノナリ

第四ノ所得ノ更訂

- 四 就籍スヘキ者カ本籍ヲ有セタルニ至リタル前ニ本籍ヲ有シタルトキハ其舊本籍地
- 五 就籍スヘキ者カ戸主ナルトキハ其旨
- 六 就籍スヘキ者カ家族ナルトキハ戸主ノ氏名稱職及ヒ其者ト戸主トノ續柄
- 七 就籍スヘキ者カ戸主及ヒ家族ナルトキハ戸主家族ノ別及ヒ家族ト戸主トノ續柄
- 八 就籍スヘキ者カ他家ヨリ入りテ戸主又ハ家族ト爲リタル者ナルトキハ其原籍地原籍ノ戸主ノ氏名稱職及ヒ其戸主ト就籍スヘキ者トノ續柄 就籍スヘキ者カ他家ヨリ入りテ戸主又ハ家族ト爲リタル者ナル場合ニ於テ其原籍地原籍ノ戸主ノ氏名等ヲ記載スルニハ就籍スヘキ者カ他家ヨリ入りタル當時ニ於ケル原籍地原籍ノ戸主ノ氏名等ヲ記載スヘキ現時ニ於ケル其他家ノ本籍地戸主ノ氏名等ヲ記載スヘキニアラス何トナレハ第八號ノ事項ヲ記載キシムルハ戸籍ニ戸籍法第七十六條第七號ノ事項ヲ記

載セシカ爲メニ外ナラザレハナリ

前項第六號及ヒ第七號ノ場合ニ於テ就籍スヘキ家族カ他家ヨリ入りテ他ノ家族ノ配偶者ト爲リタル者ナルトキ又ハ他ノ家族ヲ經テ戸主トノ親族關係ヲ有スル者ナルトキハ届書ニハ其者ト戸主トノ續柄ノ外他ノ家族トノ續柄ヲモ記載シ若シ他ノ家族トノ親族關係ヲ有スル者ナルトキハ其者ト他ノ家族トノ續柄ノミヲ記載スルコトヲ要ス(以上戸第一九八條)

(注意)

(イ) 家族カ他ノ家族ヲ經テ戸主トノ親族關係ヲ有スル者ナルトキトハ戸主ノ配偶者ノ弟戸主ノ二親等ノ姻族ノ如キ者ヲ指ス

(ロ) 戸籍法第九十八條ニハ就籍スヘキ者カ戸主又ハ家族ト爲リタル原因及ヒ年月日就籍スヘキ者カ戸主ナル場合ニ於テ前戸主トノ續柄ヲモ届書ニ記載スヘシトノ明文ナシ然レトモ届書ニ之ヲ記載セザルトキハ戸籍吏ハ戸籍法第七十六條第四號及ヒ第六號前段ノ事項ヲ戸籍ニ記載スルコト能ハス故ニ予ハ少シク曲解ノ嫌ナキニアラサルモ第九十八條第五號ニ就籍スヘキ者カ戸主ナルトキハ其旨トアルハ單ニ戸主ナルコトヲ記載セシムルニ

止マラス戸主ト爲リタル原因年月日前戸主トノ續柄ヲモ記載セシムル趣旨ニシテ同條第六號第七號ニ就籍スヘキ家族ト戸主トノ續柄トアルハ單ニ戸主トノ親族關係ヲ記載セシムルニ止マラス家族ト爲リタル原因年月日ヲモ記載セシムル趣旨ナリト解釋シ此等ノ事項ヲモ届書ニ具備スヘキ要件ト爲スヲ相當ナリト史料ス

除籍ノ届書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 一 除籍スヘキ者ノ氏名族稱職業本籍地及ヒ復本籍地 茲ニ本籍地ト謂フハ真正ノ本籍地ヲ謂ヒ復本籍地トハ除籍セントスル本籍地ヲ謂フ
- 二 復本籍ヲ有スル原因
- 三 除籍スヘキ者カ本籍ト復本籍トニ於テ身分ヲ異ニスルトキハ本籍並ニ復本籍ニ於ケル身分及ヒ其身分ノ異ナル原因 甲家ニ在ル女カ婚姻ニ因リ乙家ニ入り乙家ノ戸籍ニ入籍ノ手續ヲ爲シタルモ甲家ノ戸籍中其者ニ關スル部分ヲ抹消セザリシ爲メ復本籍ヲ有スルトキハ其者ハ本籍ト復本籍トニ於テ身分ヲ異ニス即チ真正ノ本籍タル乙家ノ戸籍ニ在リテハ妻タ



ル身分ヲ有スルモ複本籍タル甲家ノ戸籍ニ在リテハ此ノ如キ身分ヲ有セ  
ス次ニ除籍スヘキ者カ一ノ戸籍ニハ甲ノ子ト記載シアルヲ他ノ戸籍ニハ  
乙ノ子ト記載シアルトキモ亦身分ヲ異ニス

(四三) 確定判決ニ依リテ届出ヲ爲ス場合ノ手續 戸主又ハ家族カ本籍ヲ有セ  
ス又ハ複本籍ヲ有スル場合ニ於テ區裁判所ノ許可ヲ得テ就籍又ハ除籍ノ届出  
ヲ爲スヲ得ルハ戸主ニ限ル然ルニ例ヘハ家族カ本籍ヲ有セス又ハ複本籍ヲ有  
スルニ拘ラス戸主カ其家族ヲ嫌忌スル等ノ事情ニ因リ戸主ヨリ就籍又ハ除籍  
ノ届出手續ヲ爲ササルコトアリ此ノ如キ場合ニ於テハ就籍又ハ除籍スヘキ本  
人又ハ利害關係人ハ戸主ニ對シ就籍又ハ除籍ノ届出手續ヲ爲スコトヲ求ムル  
訴ヲ司法裁判所ニ提起スルコトヲ得戸第二〇一條此訴ノ手續ニ付キテハ法令  
ニ別段ノ規定ナキカ故ニ普通ノ民事訴訟ノ手續ニ從ハサルヘカラス  
前項ノ訴訟ニ於テ原告勝訴ノ判決アリテ其判決確定シタルトキハ原告ハ判決  
カ確定シタル日ヨリ十日内ニ判決ノ原本ヲ添ヘテ就籍又ハ除籍スヘキ地ノ戸  
籍吏ニ就籍又ハ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ要ス此届出ニ具備スヘキ諸件ハ前

(四二) 届出ニ付キ違ヘタルトコロニ同シ以上戸第二〇一條

### 第四編 罰則

#### 第一章 懲戒罰

(四四) 總論 既ニ第一編ニ於テ説明シタル如ク身分登記及ヒ戸籍ニ關スル事  
務ハ國家ノ行政事務ニシテ此事務ヲ取扱フ戸籍吏ハ國家ノ行政機關タリ  
國家ノ機關ヲ充ス者ハ忠實ニ其職務ヲ執ルヲ要スル義務ヲ負フ然ルニ國家ノ  
行政機關タル戸籍吏ノ地位ヲ充ス者カ其職務上ノ義務ニ違背シテ職務ニ忠實  
ナラサルコトナシトセス故ニ戸籍吏ノ地位ヲ充ス者ヲ強制シテ其職務ニ忠實  
ナラシメシカ爲メ戸籍法ニ懲戒罰ニ關スル規定ヲ設ク左ノ如シ

第一 戸籍吏ハ左ノ場合ニ於テハ三十圓以下ノ過料ニ處セラルル戸第二一二條  
一 正當ノ理由ナクシテ身分又ハ戸籍ニ關スル届出若シハ申請ヲ受理セザ  
ルトキ

二 身分登記又ハ戸籍ノ記載ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

第二 戸籍吏ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以下ノ過料ニ處セラレ(戸第二二三條)

- 一 正當ノ理由ナクシテ身分登記簿又ハ戸籍簿ノ閲覧ヲ拒ミタルトキ
- 二 正當ノ理由ナクシテ身分登記又ハ戸籍ノ謄本若クハ抄本ヲ交付セズ又ハ身分若クハ戸籍ニ關スル届出又ハ申請ノ受理ノ證明書ヲ交付セザルトキ

國家ノ機關ヲ充ス者ニ科スヘキ最重ノ懲戒罰ヲ免職トス然ルニ戸籍吏ノ地位ヲ充ス者ハ既ニ第一編ニ於テ説明シタル如ク市町村長其他ノ地位ヲ充スニ因リ當然戸籍吏ノ地位ヲ充スモノニシテ市町村長其他ノ地位ヨリ去ルニアラザレハ到底戸籍吏ノ地位ヲ去ルコト能ハス故ニ戸籍法ニハ免職ニ關スル規定ノ設ナシ隨テ戸籍吏ノ地位ヲ充ス者カ身分登記又ハ戸籍ニ關スル事務ヲ執ルコトヲ怠リ又ハ之ヲ執ルニ方リ其職務上ノ義務ニ違背シタルトキト雖モ之ヲ免職スルコトヲ得ザルモノトス

戸籍吏ノ地位ヲ充ス者ニ科スヘキ懲戒罰ハ前ニ掲ケタル過料ニ限ラル但戸籍吏ニ對シ監督權ヲ有スル者(三)參照ハ戸籍吏カ其職務ニ不忠實ナルカ如キ場合

ニハ之ニ對シ監督權ノ行使ニ依リ讞告ヲ爲スコトヲ得(戸第五條第二項)又(四五)過料ニ處スルノ手續 本章ニ掲ケタル過料ニ處スル手續ハ次章ニ掲ケタル過料ニ關スル手續ニ同シ(戸第二一四條)

第二章 行政罰

(四六)總論 身分又ハ戸籍ニ關スル届出義務者又ハ申請義務者カ届出又ハ申請ヲ爲スコトヲ怠ルコトナシトセス故ニ之ヲ強制シテ届出又ハ申請ヲ爲サシムル爲メ戸籍法ニ罰則ノ規定ヲ設ケアリ即チ左ノ如シ

- 第一 戸籍法ニ定メタル期間内ニ爲スヘキ届出又ハ申請ヲ怠リタル者ハ十圓以下ノ過料ニ處セラレ(戸第二一〇條) 例(ハ)出生ノ届出義務者カ戸籍法第六十八條ニ定メタル期間内ニ届出ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ又ハ同法第七十六條ニ依リ棄兒發見ノ登記ノ取消ヲ申請スヘキ義務ヲ負フ者カ同條ニ定メタル期間内ニ其申請ヲ爲スコトヲ怠リタルトキノ如シ
- 第二 期間内ニ届出又ハ申請ヲ爲サザルニ因リ戸籍吏カ期間ヲ定メテ届出又

ハ申請ノ催告ヲ爲シタル場合ニ於テ尙ホ其届出又ハ申請ヲ怠リタル者ハ二十圓以下ノ過料ニ處セラルニ同以上戶籍吏ノ催告ニ應セザル者亦同シ戸籍第二一條）戸籍吏カ期間ヲ定メテ届出又ハ申請ノ催告ヲ爲ス場合ニ付キテハ戶籍法第六十三條第二條ヲ參照スヘシ

右ニ掲タル過料ハ届出義務者又ハ申請義務者カ期間内ニ届出又ハ申請ヲ爲サザリシゴトカ公ノ秩序ヲ侵害シタルニ因リ之ヲ科スルニアラス届出義務者又ハ申請義務者ヲ強制シテ届出又ハ申請ヲ爲サシムルコトヲ目的トスルモノナルカ故ニ行政罰ニ屬ス

(注意) (イ) 本文ニ掲タル過料ハ私人ヲ強制シテ其戶籍法上ノ義務ヲ履行セシムルコトヲ目的トシ國家ノ機關ヲ強制シテ其職務ニ忠實ナラシムルコトヲ目的トセス故ニ懲戒罰ニアラス隨テ前章ノ過料ト其性質ヲ異ニス

(ロ) 本文ニ掲タル過料ハ申請又ハ届出ヲ怠リタルコトカ公ノ秩序ヲ侵害シタルニ因リ之ヲ科スルニアラス此點ニ於テ刑罰ト異ナル

(四七) 過料ニ處スル手續 過料ノ裁判ハ過料ニ處セラルヘキ者ノ住所又ハ居

所ノ地ヲ管轄スル區裁判所之ヲ爲ス(戸籍第二一四條)

過料ハ刑罰ニアラス故ニ檢事ノ起訴アルコトナシ裁判所ハ自ら進ミテ其事件ヲ審理シ裁判ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

(注意) 期間内ニ届出又ハ申請ヲ爲スコトヲ怠リタル者アル場合ニ戶籍吏カ戶籍法第六十四條ニ依リ其旨ヲ管轄裁判所ニ通知スルハ裁判所ノ注意ヲ促ス爲メニ外ナラス

裁判所ハ過料ノ裁判ヲ爲ス前ニ過料ニ處セラルヘキ者ノ書面又ハ口頭ノ申述ヲ聽キ檢事ノ意見ヲ求メサルヘカラス(戸籍第二一四條ニ依リ非訟事件手續法第二百七條第二項準用)

過料ノ事件ニ付キテハ裁判所ハ職權ヲ以テ事實ヲ探知及ヒ必要ト認ムル證據調ヲ爲スコトヲ得(戸籍第二一四條ニ依リ非訟事件手續法第十一條準用)

過料ノ裁判ハ理由ヲ附シタル決定ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要シ(戸籍第二一四條ニ依リ非訟事件手續法第二百七條第一項準用)其裁判ハ過料ニ處セラルル者ニ之ヲ告知スルニ因リテ其效力ヲ生ス面シテ其告知ハ裁判所ノ相當ト認ムル方

法ニ依リテ之ヲ爲スヘキモノトス(戸第二百十四條ニ依リ非訟事件手續法第十八條準用)

過料ニ處セラレタル者及ヒ檢事ハ過料ノ裁判ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得而シテ此抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス(戸第二百十四條ニ依リ非訟事件手續法第二百七條第三項準用)

過料ノ裁判ハ檢事ノ命令ヲ以テ之ヲ執行ス此命令ハ執行力ヲ有スル債務名義ト同一ノ效力ヲ有ス

過料ノ裁判ノ執行ハ民事訴訟法上ノ強制執行ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ爲ス但執行ヲ爲ス前裁判ノ送達ヲ爲スコトヲ要セス(以上戸第二百十四條ニ依リ非訟事件手續法第二百八條準用)

要スルニ過料ノ事件ノ手續ニ付キテハ非訟事件手續法ノ規定ヲ準用スヘキモノナルカ故ニ(戸第二一四條證據調ノ方法費用ノ負擔其他ニ關シテハ非訟事件手續法第一編及ヒ同法附則ヲ參照スヘシ)

### 第三章 刑罰

(四八) 戸籍法上ノ刑罰 刑罰ハ法規ノ保護スル利益ヲ侵シ危害ヲ生セシメタル場合ニ之ヲ科ス

自己若クハ他人ノ利ヲ圖リ又ハ他人ヲ害スル目的ヲ以テ身分又ハ戸籍ニ關シ詐僞ノ届出若クハ申請ヲ爲シタル者ハ十一日以上四年以下ノ重禁錮又ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處セラル(戸第二一五條)

(注意) 自己又ハ他人ノ利ヲ圖リ若クハ他人ヲ害スル目的ヲ以テトハ獨リ財産上ノ利害ノミナラス名譽其他ノ事項ニ關スル利害ヲモ含ム故ニ例ヘハ良家ノ少女カ私生兒ヲ生ミタル場合ニ其少女ヲシテ恥辱ヲ被ラサラシメンカ爲メ其子ヲ自己ノ子ナリトシテ詐僞ノ出生届ヲ爲シタル者ノ如キモ亦戸籍法第二百十五條ノ刑罰ニ處セラル

戸籍法ニ掲ケタル特別ノ刑罰ハ前ニ述ヘタル第二百十五條ノ刑罰ノミナリ然レトモ戸籍吏カ其管掌ニ係ル身分登記簿其他ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シ

ヲ行使シタルトキ、私人カ他人ノ私印ヲ偽造シテ虚偽ノ届出ヲ爲シタルトキ等  
刑法ニ規定シアル罪ヲ犯シタル者ハ同法ニ依リ刑罰ニ處セラレルコトハ言フ  
ヲ竣タス

附記

- (一) 寄留ニ關スル事務ハ身分登記又ハ戸籍ニ關スル事務ニアラス故ニ戸籍法  
實施後ト雖モ其實施前ニ於ケルト同シク市町村長又ハ區長等ニ於テ之ヲ取扱  
フヘキモノナリ
  - (二) 明治四年四月四日布告戸籍法明治十九年内務省令第十九號及ヒ同年内務  
省令第二十二號中寄留ニ關スル規定ハ未ダ廢止セラレヌ(戸籍第二十二條第一項)  
故ニ寄留ニ關スル手續ハ戸籍法實施後ト雖モ其實施前ニ於ケルト異ナルコト  
ナシ
- 但寄留ニ關スル事務ノ監督ニ付キテハ戸籍法第二百二十二條第二項ニ依リ同  
法第五條ノ規定ヲ準用スヘキコトト爲リタリ

戸籍法 終

目録

三

法學士 島田鐵吉 講述

戶籍法

(特別法講義卷)

法政大學發行

戸籍法目次

第一編 總論

第一章 戸籍法

第二章 身分登記及ヒ戸籍ニ關スル事務

第三章 身分登記及ヒ戸籍ニ關スル事務ヲ行

フ機關

第四章 抗告

第二編 身分登記

第一章 身分登記簿

第二章 身分登記簿

第三章 登記手續

第一節 登記ヲ爲ストテ要スル場合

第二節 登記前ノ手續

戸籍法目次

志賀大...

第三節	登記ノ手續	四三
第四節	登記後ノ手續	五九
第四章	身分ニ關スル届出	七三
第一節	通知	七三
第二節	出生ニ關スル届出	九三
第三節	嫡出子否認ニ關スル届出	一三八
第四節	私生子認知ニ關スル届出	一四一
第五節	養子縁組ニ關スル届出	一五四
第六節	養子離縁ニ關スル届出	一六五
第七節	婚姻ニ關スル届出	一七五
第八節	離婚ニ關スル届出	一八二
第九節	後見ニ關スル届出	一八七
第十節	隠居ニ關スル届出	一九六
第十一節	失踪ニ關スル届出	二〇二

第十二節	死亡ニ關スル届出	二〇五
第十三節	家督相續ニ關スル届出	二一〇
第十四節	推定家督相續人ノ廢除ニ關スル届出	二一七
第十五節	家督相續人ノ指定ニ關スル届出	二二二
第十六節	入籍、離籍、復籍、拒絶及ヒ離籍復籍拒絶又ハ復籍スヘキ家ノ廢絶ニ因ル一家創立ノ届出	二二八
第十七節	廢家絶家及ヒ絶家ニ因ル一家創立ニ關スル届出	二四三
第十八節	分家及ヒ廢絶家再興ニ關スル届出	二四九
第十九節	同籍ノ得喪ニ關スル届出	二五四
第二十節	氏名及ヒ族稱ノ變更ニ關スル届出	二六二
第二十一節	身分登記變更ニ關スル届出	二七〇
第三編	戸籍	二七五
第一章	戸籍	二七五



第二章 戸籍簿……………二七七

第三章 戸籍ノ記載手續……………二七九

第四章 戸籍ニ關スル届出……………二九六

    第一節 通知……………二九六

    第二節 轉籍ニ關スル届出……………三〇一

    第三節 就籍及ヒ除籍ニ關スル届出……………三〇四

第四編 罰則……………三一三

第一章 懲戒罰……………三一三

第二章 行政罰……………三一五

第三章 刑罰……………三一九

附記……………三二〇

    第十條……………三二七

    第十三條……………三三〇

    第十四條……………三三〇

    第十五條……………三三〇

戸籍法目次

終

三二〇

三二〇

三二〇

三二〇

三二〇

三二〇

三二〇

三二〇

知ルヘク之ヲ第三取得者ニ就テ見レハ抵當權者ニ對シテ有スル一ノ債權ナリト謂ヒ得ヘキモノトス果シテ然ラハ權利ハ公益ニ害ナキ限り之ヲ拋棄シ得ヘキハ近世法律ノ大原則ナルカ故ニ第三取得者ノ行為ニ依リ其拋棄ノ意思ヲ認メ得テ且其意思表示カ公益ニ害ナキ限ハ抵當權實行ノ通知ヲ要セスシテ就賣ノ申立ヲ認許セサルヘカラサルヘシ然リ而シテ第三取得者カ前示ノ通知ヲ受タルノ權利ヲ拋棄スルコトカ公益ニ害ナキハ疑ナキ所ニ屬シ且第三取得者カ自ラ隱晦シテ右ノ通知ヲ受ケタルニ於テハ之ヲ受タルノ權利ヲ拋棄シタルモノト認ムルニ難カラサルヲ以テ苟モ抵當權者カ此事實ヲ證明シタルニ於テハ(例ヘハ)執達吏ニ右ノ通知ヲ委任シタルニ第三取得者カ所在ヲ晦マシテ其通知ヲ受ケストノ事實ヲ當該執達吏ヲシテ證明セシムル等ノ手段ニ依リ裁判所ハ其就賣ノ申立カ抵當權實行ノ通知ノ手續ヲ履踐セサルモノタルニ拘ハラズ之ヲ認許シテ就賣ノ手續ヲ開始セタルヘカラサルモノト信スベシ其附屬ノ事項ハ第四ヘ抵當權實行ノ通知ノ不能ナル場合合致スル附屬ノ事項ニ受領スルモノト信ス抵當權者カ前陳ノ通知ヲ第三取得者ニ爲サシムルニ方リ例ヘハ第三取得者

就賣法 不動産ノ就賣 不動産就賣ノ申立

ノ所在不分明ニシテ當時ノ事情ニ於テ到底其通知ヲ爲ス能ハサルコトナシト  
 謂フヘカラス我民法ハ第四百九十四條ニ於テ債權者カ辨濟ヲ受領スルコト能  
 ハサルトキハ辨濟者ノ債權者ノ爲メニ辨濟ノ目的物ヲ供託シテ其債務ヲ免ル  
 ルコトヲ得ヘク又々辨濟者ニ過失ナクシテ債權者ヲ確知スルコト能ハサルト  
 キ亦之ニ同シトノ規定ヲ設ケルモ此規定ハ直接ニ之ヲ本件ノ場合ニ適用スル  
 コト能ハス隨テ多少ノ疑ヲ存セサルニ非ズルヘシト雖モ履行ノ不能ナルニ方  
 リ之カ履行ヲ賣ムルコトナキハ近世法律ノ大原則ニ屬スルノミナラス抵當權  
 者ニ過失ナクシテ第三取得者ヲ確知スル能ハサル場合ニ於テ之ニ對スル通知  
 ノ義務ヲ免カルヘキコトハ民法第四百九十四條末段ノ規定ノ類推解釋上之ヲ  
 認メ得ヘキヲ以テ此ノ如キ場合ニ於テハ裁判所ハ抵當權實行ノ通知ノ存在ヲ  
 待ツコトナク競賣ノ手續ヲ開始スヘク而カモ第三取得者ハ抵當權者ニ對シ何  
 等賠償ノ請求ヲ爲ス能ハサルモノト信ス但通知不能ノ證明ニ付キテハ第三ノ  
 場合ニ付キ陳ヘタルト同一ノ手續ニ從フヲ可トスヘク裁判所ハ果シテ當時ノ  
 事情ニ於テ通知ノ不能アリト認ムヘキヤ否ヲ審按シテ競賣ノ申立ノ許否ヲ決

スヘキモノナリト信ス

第二款 形式上ノ要件即チ不動産競賣申立  
 ノ手續

第一項 申立書ニ記載スヘキ事項

不動産ノ競賣ハ申立ニ因リ之ヲ爲スヘキモノニシテ其申立ニハ前款ニ陳ヘタ  
 ル實體法上ノ要件ヲ具備スルノ必要アルハ勿論其他尙ホ競賣申立書ニ左ニ掲  
 タル事項ヲ記載シ申立人ノ署名捺印スルヲ要ス又々若シ代理人ニ依テ競賣  
 ノ申立ヲ爲ストキハ代理人其申立書ニ署名捺印スルコトヲ要ス(第二四條其記  
 載スヘキ事項左ノ如シ)

第一 債務者及ビ所有者ノ氏名住所  
 此表示ハ競賣ノ基因スル債務ヲ負擔スル債務者ノ何人ナルカ就ニ競賣セラ  
 ルヘキ不動産ノ所有者ノ何人ナルカヲ識別シ得ヘキ程度ニ於テ之ヲ爲スコトヲ  
 要ス隨テ通常ハ其者ノ住所身分職業ヲ記載スルヲ以テ足ルヘシ

債務者ト所有者トノ兩者ヲ表示スル必要アル場合ハ例ヘハ乙カ甲ニ對シテ債務ヲ負擔スル場合ニ於テ此債務ノ擔保トシテ丙者カ同人所有ノ不動産上ニ甲ノ爲メニ抵當權ヲ設定シタルニ乙ハ蓋ニ其債務ヲ履行セズ其結果甲ニ於テ抵當權ノ實行トシテ丙所有ノ不動産ノ競賣ヲ申立ツル場合ノ如キ之ナリ然レトモ債務者ト不動産ノ所有者トカ同一人タル場合モ亦之無キニ非ス例ヘハ乙カ甲ニ對シテ債務ヲ負擔スル場合ニ於テ其擔保トシテ自己所有ノ不動産上ニ甲ノ爲メニ抵當權ヲ設定シタルモ債務者カ其債務ヲ履行セザル爲メ該抵當權ノ實行トシテ競賣ノ申立ヲ見ルニ至ルカ如キ之ナリ此場合ニ於テハ債務者ト不動産ノ所有者トハ同一人ナルカ故ニ特ニ兩者ヲ繰返シテ申立書ニ記載スルノ必要ナキヤ勿論ナルモ此如キ場合ニ於テモ競賣ヲ申立テララル者ノ氏名ノ上ニハ必ス債務者ニシテ且所有者ナルコトヲ示サシカ爲メ債務者所有者ヲフ文字ヲ記載スルヲ要シ若シ之ヲ缺カハ申立書ハ法定ノ要件ヲ缺タカ故ニ其申立ハ無効ナリトハ東京地方裁判所ノ判例トスル所ナリ尙ホ競賣法ニ依ル競賣ハ必シモ常ニ債務不履行ノ結果トシテノミ生スル所ニ

非ナルハ前陳ヘタルカ如クナルカ故ニ(本講義錄第五頁參照別ニ)債務者ヲフ者ヲ存セザル場合ニ於テハ申立書ニ「債務者ヲフ文字ヲ記載スルノ必要ナキヤ勿論ナリ」隨テ單ニ所有者トシテ競賣セラレヘキ不動産ノ所有者ノ氏名ヲ掲クヘキモノト信ス

之ヲ要スルニ競賣法ニ所謂債務者所有者ヲフ文字ハ民事訴訟法ニ於テ強制執行ヲ受クヘキ義務者ヲ一般ニ債務者ト稱シ強制執行ヲ求ムル權利者ヲ一般ニ債務者ト稱スルカ如キコトトハ全然其趣ヲ異ニスルモノニシテ競賣法ニ所謂債務者所有者ヲフ文字ノ意義ノ如何ハ全ク民法上ノ觀念ニ基テ解釋スヘキモノトス何トナレハ競賣法ハ民法發布ノ後同法等ノ實體法ヲ實施スルノ手續法トシテ發布セラレタル法律ナレハナリ

第二 競賣ニ付スヘキ不動産ノ表示

競賣ノ目的タルヘキ不動産ハ必シモ債務者ノ所有ニ係ルコトヲ要セザルハ前陳ヘタルカ如シ然レトモ競賣セラレヘキ不動産カ土地ナルトキハ其所在ノ國、郡市、町村、字、番地及ヒ其地目、反別若クハ坪數ヲ表示スルコト例ヘハ何國、何郡何

町何村大字何何字何何番地田舎タハ畑山林宅地何町何反何畝何歩(若クハ何坪)ト云フカ如ク記載スヘク若シ其不動産カ建物ナルトキハ其所在ノ國郡市町村字番地及ヒ其構造ノ種類建坪ヲ表示スルコト例ヘハ何市何町何番地木造若クハ石造土蔵造等平家建若クハ二階建ト云フカ如キ建坪何坪ト云フカ如ク記載シ二階建ノモノニ付テハ二階坪ト平坪トヲ各別ニ表示シ尙ホ其總坪數ヲ記載スヘキモノト信ス

第三 競賣ノ原因タル事由ニ依リテ國々全ク或モ土地ノ歸屬ニ基キ競賣スヘキ例ヘハ申立人ヨリ債務者ニ金錢ヲ貸付ケタルニ辨濟期ニ至リ辨濟セサルカ故ニ抵當權ノ實行トシテ其目的タル不動産ノ競賣ヲ申立ワト云フカ如シ一債權ニ注意スヘキハ競賣法ニ依リ競賣ヲ申立ツルニハ其申立ノ根據スル權利カ現ニ存在スルモノナリトノコトヲ判決ニ依リ認メラレタルコトヲ要セス又タ必シモ公正證書ニ記載セラレタルコトヲ要セザルコト之ナリ隨テ例ヘハ單ニ貸主ト借受人トノ間ニ私署證書ヲ以テ債權ノ存在ヲ證シタル場合ニ在テモ荷モ之カ擔保タル抵當權ノ設定カ登記セラレ居ルニ於テハ債務者ノ不履行ノ場合ニ

於テハ直チニ抵當權ノ實行トシテ競賣ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ

次ニ例ヘハ抵當權ノ實行トシテ抵當權者ヨリ目的不動産ノ競賣ヲ申立テタル場合ニ於テ或ハ債務者カ抵當權其モノノ擔保スル債權ノ存在セザル旨ヲ主張シ例ヘハ金圓ヲ借受ケタルコトナシト争フコトスルヘク又タ抵當權ヲ設定セル者ナリトシテ登記簿ニ表示セラルル者カ抵當權ヲ設定シタル事實ナシト主張スルコトアリテ其結果競賣申立人ト債務者若クハ所有者即チ例ヘハ抵當權設定者ナリト表示セラルルモノトノ間ニ前示ノ事實ニ付キ争フ生スルコトナシトセス此場合ニ關シ某區裁判所ハ「競賣事件ハ非訟事件ノ一ナリ非訟事件ノ特質ノ如何言ヲ換ヘテ云ヘハ非訟事件ト訴訟事件トノ區別ノ存スル所ハ實ニ當事者ノ間ニ争ノ無キコトニ在リ故ニ競賣ノ申立アリタルニ當リ債務者ナリトセラルル者カ債務ノ成立ヲ争フカ又ハ抵當權設定者ナリトセラルル者カ抵當權ノ設定ヲ争フトキハ其事件ハ非訟事件タルノ性質ヲ失フニ至ル隨テ其競賣ノ申立ハ之ヲ不適法トシテ却下セザルヘカラ」スラフ趣旨ニ基キ既ニ前ニ一度申立人ノ申立ニ因リ決定シタル競賣手續ノ開始決定ヲ取消シ非訟事件手續

競賣法

不動産ノ競賣 不動産競賣ノ申立

法第十九條第一項ニ裁判所ハ裁判ヲ爲シタル後其裁判ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ取消シ得ル旨ノ規定アルニ基テカ如シ(競賣ノ申立ヲ却下シタルコトナキニ非ス)然レトモ非訟事件ト訴訟事件トノ區別ハ當事者間ニ於ケル争ノ有無ニ依テ相較ルルモノニ非ナルカ故ニ前示ノ如キ裁判ノ不當ナルコトハ今ヤ殆ト一般ニ認許セラルルカ如シ

第四 年月日ニ於テ其申請書ト其申立書ト提出セラルル時ノ年月日ヲ記載表示スヘキヤ勿論ナリ

第五 裁判所ニ於テ其申請書ト其申立書ト提出セラルル時ノ年月日ヲ記載表示申立人カ事件ノ管轄裁判所ナリトシテ本講義條第一〇頁参照競賣手續ノ開始ヲ求ムル裁判所ヲ表示スルコト之ナリ

以上ニ關シ書式第一號ヲ参照スヘシ

①書式第一號 對不動産競賣申立書

不動産競賣申立書

收入  
印紙

府市區町番地士族職業  
縣郡村番地平民職業  
申立人 甲 野 乙 半

府市區町番地士族職業  
縣郡村番地平民職業  
所債所有者 丙 野 丁 次 郎

競賣ニ付スヘキ不動産

何所何番

一 宅地何坪也

競賣ノ原因タル事由

右地所ハ前記丙野丁次郎所有ノ處云云(競賣ノ原因タル事實ヲ記入スルコトヲ要ス)ニ付キ競賣手續ノ開始相成度別紙書類相添此段申立候也

一 土庫 附屬書類ノ表示

競賣法

不動産ノ競賣 不動産競賣ノ申立

競賣法 不動産ノ競賣 不動産競賣ノ申立

二六

- 一 土地登記簿謄本
- 一 土地臺帳謄本
- 一 公課證明書
- 一 云云
- 一 明治 年 月 日

右申立人 甲 野 乙 平郎

何區裁判所 某廠

(注意一) 記載事項添附書類等ニ付テハ凡ヘテ本節第二款ノ説明ヲ參酌スヘシ  
 競賣セラレヘキ不動産カ土地ト家屋トアルトキ又ハ各敷箇アルトキハ之ニ  
 應シテ登記簿謄本證明書等ヲ添附スヘク又タ不動産ヲ申立書中ニ表示記載  
 スルニモ又タ附屬書類ヲ添附スルニモ番地等ノ順序ヲ追フコトヲ可トスル

ヤ勿論ナリ  
 (注意二) 實際ノ手續少クトモ東京區裁判所ニ於ケル取扱ニ於テハ同様ナル申  
 立書ニ通テ提出セシメ其副本タルヘキモノハ競賣ノ申立アリタルコトノ記  
 入登記ヲ不動産ノ所轄登記所ヘ囑託スルニ方リ利用スルコト後ニ説クカ如  
 シ但正本ニハ印紙ヲ貼用シ附屬書類ヲ添附スヘク此分ハ裁判所ニ保存セラ  
 ル副本ハ正本ト全然同一ノ記載ヲ有スルコトヲ要スルモ印紙ノ貼用ヲ要セ  
 ス又タ附屬書類ヲ添附スルコトヲ要セス

(注意三) 競賣申立書ニハ手数料トシテ金貳拾錢ニ相當スル收入印紙ヲ貼用ス  
 ルコトヲ要ス又タ申立書ノ用紙ハ美濃紙ヲ用フヘキモノトス(民事訴訟用印  
 紙法第一〇條第一六條參照)

(注意四) 實際ノ手續ニ於テハ事件ノ迅速ニ進行スルコトヲ計ルカタメ申立人  
 ヲシテ競賣ノ申立書提出ノ際其競賣ニ付セラレヘキ不動産ヲ表示シタル目  
 録(同一ナルモノ若干通ヲ提出セシメ之ヲ不動産ノ評價ヲ命シ執達吏ニ公課  
 金額等ノ取調方ヲ命シ競賣開始決定ヲ爲シタルコトヲ告知シ利害關係人ニ

競賣法 不動産ノ競賣 不動産競賣ノ申立

二七

競賣ノ期日ヲ通知スル等種類ノ場合ニ利用ス其何通ヲ要スルヤハ利害關係人ノ人數ノ多寡等ニ依リ同シカラスト雖モ少クトモ十數通ヲ要ス其書様左ノ如シ(用紙ハ美濃ヲ可トス)

不動産目録

一 東京市何區何町何番地 所在  
木造瓦葺平家建 壹棟  
此建坪何坪何合也

第二項 競賣申立書ニ添附スヘキ書類

競賣申立書ニハ左ノ書類ヲ添附スルコトヲ要ス  
第一 委任狀

代理人ヲシテ競賣ノ申立ヲ爲サシムルトキハ競賣申立書ニ其委任狀ヲ添附スルコトヲ要ス(第二四條第三項後段其委任狀ハ如何ナルモノタルヲ要スルヤニ

付テハ法律ニ別段ノ制限ナキカ故ニ苟モ競賣ノ申立ヲ委任シタリトノ事實ノ認メ得レハ可ナリ隨テ通常ハ競賣セラルヘキ目的物件ヲ表示シ之カ所有者ノ宿所氏名等ヲ表示シ又タ其受任者即チ代理人タルヘキ者ノ宿所氏名等ヲ表示シ又タ委任ノ年月日ヲ記載シ委任者之ニ署名捺印スルヲ以テ足レリト云フヘシ印紙稅法第四條參照

次ニ代理人タルヘキ者ハ如何ナル資格ヲ備ヘサルヘカラサルカニ付キテハ競賣法ニハ別段ノ規定ナキヲ以テ總則トモ謂フヘキ非訟事件手續法ノ規定ニ從テ之ヲ決スヘキモノト信ス而シテ同法ニ依レハ苟モ訴訟能力ヲ有スル者タルニ於テハ此點ニ付キ民事訴訟法第四三條參照之ヲ以テ申立ノ代理人ト爲スコトヲ得ヘク(非訟事件手續法第六條第一項唯此代理人カ辯護士ニ非サルニ代理ヲ營業トスル者ナルニ於テハ裁判所ニ於テ之ニ退斥ヲ命スルコトヲ得ヘク其結果競賣申立人ハ更ニ自身其申立ヲ爲スカ又ハ他ニ相當ノ代理人ヲ選定シテ之ヲシテ更ニ申立ヲ爲サシムルノ必要ヲ見ルニ至ルヘシ(非訟事件手續法第六條第二項)

第二 競賣ニ付スヘキ不動産ニ關スル登記簿ノ謄本第二四條第三項前段參照  
此謄本ヲ求ムルニハ不動産登記法施行細則明治三十二年司法省令第十二號第  
二十九條以下ノ規定ニ從ヒ相當ノ申請書ヲ提出スルヲ要シ尙ホ明治三十二年  
司法省令第十四號第一條並ニ同第五條ニ從ヒ相當ノ手数料ヲ納ムルコトヲ要  
スルヤ勿論ナリ

注意スヘキハ申立人ハ極メテ最近ノ謄本ニ依リ競賣ノ申立ヲ爲スヲ要スルコ  
ト之ナリ然ラサルトキハ例ヘハ申立人カ抵當權設定ノ事實ノ記載アル登記簿  
ノ謄本ヲ得タル後ニ於テ物件所有者カ第三者ノ爲メニ其不動産例ヘハ土地ノ  
上ニ地上權ヲ設定スル等ノ事實ヲ生スルコトアルヘク此事實ヲ知ラスシテ競  
賣ヲ申立ツルモ申立人ハ抵當權實行ノ通知ヲ地上權者ニ通知セサルノ過失ア  
リテ其申立ヲ却下セラルルノ不幸ヲ見ルカ如キコトアルヘケレハナリ民法第  
三七八條第三八一條參照

但競賣ニ付スヘキ不動産カ登記簿ニ登記アラサルトキハ登記簿以外ノ證書ヲ  
以テ其所有ヲ證スルコトヲ得第二四條第四項民事訴訟法第六四三條第一項第

二號土地臺帳家屋臺帳ノ謄本ノ如キ之ナリ注意スヘキハ民事訴訟法ニハ債務  
者ノ所有タルコトヲ證スヘキ證書トアルモ本法ハ之ヲ準用スルニ過キサルカ  
故ニ競賣ニ付スヘキ物件ノ所有者タルコトヲ證スヘキ證書ト解釋スヘキモノ  
トス何トナレハ準用トハ採リ得ヘキ範圍内ニ於テ法條ヲ援用スルノ謂ナレハ  
ナリ

尙ホ注意スヘキコトハ競賣ノ目的物件カ土地ナルトキハ常ニ土地臺帳ニ依リ  
右ノ事實ヲ證明シ得ルカ故ニ別ニ問題ヲ生セサルモ目的物件カ家屋ニシテ且  
其建築ノ事實カ未タ所轄行政官廳ニ届出ナキトキハ如何ナル手段ニ依リ右ノ  
事實ヲ證明スヘキヤテフ問題ヲ生ス

依テ按スルニ民事訴訟法ノ規定ノ準用ノ結果トシテ登記簿ニ登記アラサル建  
物ニ付テハ登記簿ノ謄本ハ事實上提出スル能ハサルカ故ニ此場合ニ在テハ被  
申立人ノ所有タルコトヲ證スヘキ證書ヲ添附スルコトヲ要スル旨明白ナルモ  
其證書トハ公ノ機關カ作成シタル公ノ證書タルヲ要スルヤ將タ一私人ノ作成  
ニ係ル私ノ證明書ニテ足ルヤ否ニ付キテハ別段ノ明文ヲ存セス之ヲ判別スル

競賣法 不動産ノ競賣 不動産競賣ノ申立



ニ苦ム而シテ民事訴訟法第六百四十三條第二項ニ依レハ登記簿ニ登記アラザル不動産ニ付テハ公簿ヲ主管スル官廳勿論登記ヲ管掌スル官署ニ非サル官衙例ヘハ區役所等ノ意ナリト信スニ其證明書ヲ求ムルコトヲ得ル旨ノ記載アレトモ前示ノ如ク毫モ建築ノ事實ノ届出ナキニ於テハ事實ニ於テ之カ證明書ヲ求メ得サルノ理ナルカ故ニ此法文ハ唯々建築ノ事實カ官廳ニ届出テアリタル場合ニ於テ該官廳ニ證明書ヲ求メ得ルノ意ト解スヘク未タ直ニ之ニ據リ常ニ必ス官廳ノ證明書ヲ要スルモノトハ解釋スル能ハス之ヲ以テ實際少クトモ東京區裁判所ニ於テハ競賣ノ目的物件タル建物カ登記簿ニ登記ナク又タ其他官廳ニ届出ナキ場合ニ於テハ建物所在地ノ地主又ハ其差配人ノ證明書ヲ提出セシムルヲ以テ足レリト爲ス(書式第貳號參照)

◎書式第貳號

建物所有ニ關スル證明書

證明書

東京市何區何町何番地

受人ハ民法規定ニ依リ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得ヘキハ勿論國家ハ特定ノ侵害行為ニ對シテハ更ニ刑ノ制裁ヲ設ケタリ即チ(一)他人ノ特許品ヲ偽造シタル場合(二)情ヲ知リテ偽造品ヲ使用若ハ販賣シタル場合(三)他人ノ特許方法ヲ竊用シタル場合(四)他人ノ特許方法ヲ竊用シテ製造シタル物品ヲ情ヲ知リテ使用若ハ販賣シタル場合(五)他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知リテ之ヲ外國ヨリ輸入シタル場合及ヒ(六)右ノ輸入品ヲ情ヲ知リテ使用シ又ハ販賣シタル場合はナリ此他尙特許權ノ侵害タルヘキ所爲少カラスト雖法律ハ右六箇ノ場合ニ限リテ刑罰ヲ規定セリ例ヘハ特許權者ノ許諾ヲ得ズシテ特許品ヲ使用又ハ擴布シタル場合又ハ偽造品ヲ販賣以外ノ方法ニ依リテ擴布シタル場合其他善意ノ特許權侵害ノ場合ノ如キ等シク特許權ノ侵害ナルヲ以テ賠償義務ヲ免カルルコトヲ得サレトモ刑ノ制裁ヲ受クルコトナシ今右ノ刑ノ制裁アル場合ヲ逐次略説スヘシ

(一) 特許品ヲ偽造シタル場合  
特許品ノ偽造ナル語ハ餘リ適當ナル用語ニ非ス特許品ノ偽造ト云ヘハ特許品ト偽ハリ得ヘキ物ヲ造ク所義ナルカ如ク見ユ

特許法 特許權ノ效力 特許權ノ侵害

ルヲ以テ或ハ特許ノ標記ヲ付シ或ハ特許權者ノ商標等ヲ付シテ其特許品ナルヲ號フカ如キ場合ヲ指シタルキヤノ疑ナキニ非サレトモ法ノ趣旨ハ全ク之ト異ニシテ他人ノ特許品ナルコトヲ知リナカラ之ヲ製造シタルヲ謂フナリ乃テ偽造者ハ必スシモ特許品ナルコトヲ號ハントスルニ非ス又必スシモ他人ノ特許品ニ類似セシメント欲スルニ非ス否實際ニ於テハ却テ故ラニ其外形ヲ變シテ特許侵害ノ禍ヲ免カレントスルナリ他人ノ特許品ト誤認セシムヘキ標記等ヲ爲シ又ハ其外形ヲ近似セシムルモ其物品ノ構成組合セ等ニ於テ其特許品ト異ナルトキハ此ニ所謂ル偽造ニ非ス世人ヲシテ他人ノ特許品ナリト誤認セシムルハ必スシモ偽造者ノ目的ニ非ス又法ノ禁セント欲スル所ニ非ス法ノ精神ハ情ヲ知リテ他人ノ特許權ヲ侵害スヘキ製造ヲ爲シタル者ヲ罰セント欲スルナリ故ニ之ヲ偽造ト稱スルハ普通ノ用語トシテハ穩當ナラザル嫌アリ

已ニ偽造ト云フ以上ハ惡意ナルコト明カナリ故ニ他人ノ特許品ナルコトヲ知ラスシテ製作シタル者ハ刑ノ制裁ヲ受ケサルナリ偽造アリタルトキハ其物品ヲ使用又ハ頒布セザルモ犯罪ハ成立ス然レトモ其偽造シタル物品ヲ更ニ使用

又ハ販賣スルトモ二罪ト爲ルモノニ非ス換言スレハ(一)及ヒ(二)ノ犯罪ノ俱發ニ非ス

(二) 情ヲ知リテ偽造品ヲ使用若ハ販賣シタル場合 特許品ヲ自ら偽造セザルモ他人ノ偽造品ヲ偽造品タルコトヲ知リナカラ之ヲ使用シ又ハ販賣シタル者ハ偽造者ト刑ヲ同クス販賣ハ擴布ノ一種ナルコト嘗テ説明セシ所ナリ然ルニ販賣ニ限り之ヲ罰シテ他ノ擴布ノ行爲ヲ罰セザルハ販賣ノ營利行爲ナルカ爲メニ之ヲ重ク視タルナルヘシ然レトモ他ノ一切ノ擴布行爲ヲ罰セザルニ拘ハラズ自家用ノ爲メ又ハ學術研究ノ爲メ使用スル者モ亦之ヲ罰スルハ果シテ權衡ヲ得タル立法ナルヤ疑ハシ

販賣ト云フハ賣渡ト同シカラス營業的ニ賣ル場合ト解セザルヘカラス例ヘハ吾人カ一箇ノ偽造品ヲ朋友ニ賣ルモ骨董家ニ賣ルモ之ヲ販賣ト謂フヘカラス故ニ刑ノ制裁ヲ受ケサルナリ之ヲ以テ見ルモ自家用トシテ使用シタリトテ常ニ刑ヲ科スルハ偏重ノ嫌ヲ免カレサルナリ

又偽造品ヲ使用若ハ販賣云ト明記アルヲ以テ他人ノ特許品タルコトヲ知ラ

スシテ製造シタル物品ヲ情ヲ知リテ之ヲ使用若ハ販賣シタル者ハ罪トナラサルナリ是レ解釋論トシテハ疑ナキ所ナリト雖モ立法論トシテハ如何ハシキ規定ナリ夫レ他人ノ特許ヲ侵害シテ製造シタル物品ハ假令其ノ善意ナリシカ爲メニ刑ヲ科セストスルモ特許權ヲ侵害スヘキ物品タルコト明カナリ然ラハ特許權ノ侵害トナルヘキ情ヲ知リテ之ヲ使用シ若ハ販賣シタル者ハ之ヲ罰スヘキカ當然ナリ本條ノ刑罰ハ惡意ヲ以テ特許權侵害ノ行爲ヲ爲シタル者ヲ罰セントスルモノナルヲ以テ總テ惡意ノ行爲ナルコトヲ要スルハ勿論ナリト雖モ特許ヲ侵害スヘキ物品ヲ使用又ハ販賣シタル者ヲ罰スルニハ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知レルノミニテ足レリ其物品ノ製造者ノ惡意ナリシト否トヲ問フヲ要セザルナリ(是レ(四)ノ場合即チ他人ノ特許方法ヲ使用シテ製造シタル物品ヲ使用シ又ハ販賣シタル場合ニモ同シク起ルヘキ問題ナリ然ラズンハ第二項ノ規定即チ(五)(六)ノ場合ト權衡ヲ得サルナリ(五)(六)ノ場合ハ特許ヲ侵害スヘキ物品ヲ輸入シタルトキ又ハ其輸入シタル物品ヲ使用若ハ販賣シタルトキハ直ニ有罪ニシテ其物品カ惡意ノ製造ニ係ルト否トヲ問ハサルナリ)

- (三) 他人ノ特許方法ヲ竊用シタル場合 他人ノ特許方法ヲ竊用シタル者ハ罰セラル竊用ハ偽造ト等シク善意ナラサルコト自ラ明カナリ故ニ他人ノ特許方法タルコトヲ知ラスシテ使用シタル者ハ罪トナラサルナリ
- (四) 他人ノ特許方法ヲ竊用シテ製造シタル物品ヲ情ヲ知リテ使用又ハ販賣シタル場合 使用ヲ罰シテ販賣外ノ擴布ヲ全然罪トセザル立法上ノ非難ハ(二)ニ違ヘタル所ト同シ又タ他人ノ特許方法ヲ竊用シテ製造シタル云云トアルヲ以テ他人ノ特許方法ナルコトヲ知ラスシテ之ヲ使用シテ製造シタル物品ヲ特許ノ侵害トナルコトヲ知リナカラ使用若ハ販賣シタル行爲カ罪トナラサルコト恰モ他人ノ特許品ナルコトヲ知ラスシテ製造シタル物品ノ特許ノ侵害トナルコトヲ知リナカラ使用又ハ販賣シタル所爲カ罪トナラサルカ如シ從テ之ニ關スル論議ハ(二)ノ場合ニ述ヘタル所ニ準ス
- (五) 他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知リテ之ヲ外國ヨリ輸入シタル場合 本項ノ罪ハ輸入ニ依リテ完成スルモノニシテ他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知リテ輸入シタル以上ハ之ヲ輸入シタル目的ノ如何ヲ問ハス

又其數量ノ多少ヲ問ハス輸入者カ其物品ヲ未タ處分セザルトモ又如何ニ之ヲ處分シタリトモ犯罪ハ成立スルナリ例ヘハ外國旅行者カ本邦特許品ノ模造品ヲ彼地市場ニ發見シテ參考ノ爲メニ其一箇ヲ携歸ヘルモ亦此犯罪ト爲ルヲ免カレス夫レ他人ノ特許品ヲ内地ニ於テ製造使用販賣若ハ擴布スルニ非サレハ特許權ノ侵害ト爲ラサルヲ以テ他人ノ特許品ヲ輸入シタルノミニテハ特許ノ侵害ト爲ラス從テ特許權者ハ輸入者ニ對シテ要價ノ訴ヲ起コスコトヲ得ス然レトモ他人ノ特許品ナルコトヲ知リテ之ヲ輸入スルハ多クハ使用販賣擴布等ノ所爲ノ豫備行爲ト見ルヘク特許權者ハ已ニ容易ナラサル危險ノ狀態ニ在ルモノナルヲ以テ法律ハ之ヲ罰スルナリ

本項ニ於テハ他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ト稱シテ偽造品又ハ他人ノ特許方法ヲ竊用シテ製造シタル物品ト謂ハス尤モ特許ノ效力ノ及ハサル外國ニテ製造シタル場合ニハ製造者ノ善意惡意ハ問題トナラサルナリ乃チ製造其物ハ特許ノ侵害ト爲ラサル行爲ナリ然カモ尙ホ之ヲ輸入スルトキハ偽造特許品ヲ情ヲ知リテ使用又ハ販賣シタル者ト同罪ナリ然ルニ内國ニ於テ善意ヲ以テ製造

シタル特許品ヲ情ヲ知リテ使用若ハ販賣スル者ヲ罰セザルハ如何ノ理由ニ基キヤ同シク特許ヲ侵害スヘキ物品ニ非スヤ

他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品トハ之ヲ内國ニ於テ製造使用販賣若ハ擴布シタル場合ニ他人ノ特許ノ侵害トナルヘキ物品ヲ謂フ本邦ノ特許ノ效力ハ外國ニ及ハサルヲ以テ外國ニ於テ他人ノ特許品ト同一ナル物品ヲ製造スルモ不法行爲ニ非サルナリ唯此物品ヲ内國ニ於テ使用販賣擴布スルニ於テ始メテ特許ノ侵害ナル事實ヲ生スルナリ特許ヲ侵害スヘキ物品ハ必スシモ特許權者以外ノ人ニ依リテ製造セラレタル物品ニ限ラス特許權者自ラ製造セル物品ニシテ特許ヲ侵害スヘキ物品トナルコトアリ例ハ特許權者カ其特許發明ノ爲メニ更ニ外國ニ於テ特許ヲ受ケ外國ニテ之ヲ製造シタル場合ニ他人カ特許權者ノ意思ニ反シテ之ヲ内國ニ輸入シテ使用擴布ヲ爲ストキハ是亦特許ノ侵害トナルヘキナリ實際ニ於テ甚々稀有ナル事實ナリト雖特許權者カ内國ニ於ケル特許ヲ他人ニ使用セシムル契約ヲ爲セル場合ノ如キ外國ニ於テ我特許製品ヲ内國ニ輸入セシメサル意志ヲ發表スルコトアリ得ヘキナリ尙又特許品其物カ特許

ヲ侵害スヘキ物品トナルコトアリ前例ニ於テハ同一人ノ特許製品ナリト雖特許權ハ内國ノト外國ノト二箇アリ故ニ特許權其物ヨリ見ルトキハ別ノ權利ニ基ク特許品ナリ然ルニ成ル場合ニハ同一ノ特許權ノ物品カ其特許權ノ侵害ト爲ルナリ例ヘハ特許權者カ其製品ノ一部ヲ輸出スルニ當リテ特ニ輸出向キノ製造ヲ爲シテ輸出シ或ハ外國ノ顧客ヲ得シカ爲メニ特ニ價ヲ低廉ニシテ輸出セル場合ニ其物品ノ内國ニ使用擴布セラルルコトヲ禁スル意思ヲ發表スル場合アルヘシ此場合ニ於テハ之ヲ内國ニ於テ使用擴布スルトキハ亦特許ヲ侵害スヘキ物品トナルヘキナリ

(六) 輸入セラレタル特許ヲ侵害スヘキ物品ヲ情ヲ知リテ使用シ若ハ販賣シタル場合 本項ノ罰則ハ前項ト異ナリテ特許侵害ヲ豫防スル趣意ニ非スシテ現實ニ特許ノ侵害タルヘキ行爲ヲ罰スルナリ前項ニ於テ論シタルカ如ク特許ノ侵害ハ其物品ヲ内國ニテ使用又ハ擴布スルニ依リテ生シ如何ナル物品ニテモ之ヲ内國ニテ製造使用又ハ擴布スルニ非ナレハ特許ノ侵害ト爲ルコト無シ換言スレハ物品其物カ特許ヲ侵害スルト云フコト莫シテ然ラハ外國ヨリ輸入シタル物品ヲ使用販賣シテ特許權ヲ侵害スルモ内國ニテ製造シタル物品ヲ使用販賣シテ特許權ヲ侵害スルモ之ヲ區別スヘキ理由ナシ然ルニ善意ニテ製造シタル他人ノ特許品ト同一ナル物品又ハ善意ニテ他人ノ特許方法ヲ使用シテ製造シタル物品ヲ特許ノ侵害トナルヘキ情ヲ知リテ使用又ハ販賣シタル者ヲ罰セスシテ輸入品ノ場合ニ於テ之ヲ罰スルハ種々平衡ヲ得ナル立法ナリト云フヘシ本項ニ於テ情ヲ知リテト云フハ他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知ルノミニ非ス輸入シタル物品ナルコトモ亦知ルコトヲ要ス假令他人ノ特許ヲ侵害スヘキコトヲ知リテ輸入品ヲ使用販賣スルモ輸入品タルコトヲ知ラザリシナラハ罪トナラザルナリ此ニ於テ茲ニ規定ノ偏頗ナルコトヲ知ルヘシ

以上六種ノ犯罪ニ對シテ刑罰ハ總テ同一ナリ乃チ十五日以上三年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處テ凡ソ此罰則ヲ適用ニ關シテハ普通刑法ノ適用アリ又其主管ハ普通裁判所ナリ罰金又ハ禁錮ノ刑罰ニ關シテハ普通刑法ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テテ其罪ヲ論ス然レ本條ノ罰則

ハ主トシテ特許權者ノ利益ヲ保護スル目的ヲ以テ設定シタルモノニシテ特許權者ニシテ告訴スル意思ナキニ拘ハラズ國家力進ミテ之ヲ處罰スル程公益上必要ナル刑罰ニ非ザルヲ以テオリ第四十八條ニ被害者ト稱シテ特許權者ト云ハス制限ヲ付シタル特許ノ讓渡アリタル場合ニハ侵害ヲ受クル者ハ特許權者ニ非スシテ讓受人ナリ讓受人ハ特許權者ニ非スト雖被害者ナリ故ニ亦其告訴ヲ待テテ特許侵害者ヲ罰スルナリ但テ被害者ナル文字ハ他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ヲ輸入シタル場合ニハ穩カナラス何トナレバ已ニ論セザル如ク輸入ハ第四十五條ノ規定ニ依リテ始メテ不法行為タルモノニシテ本來特許侵害行為ニ非ス從テ此場合ニハ猶被害者ナル者アラサルヲ以テナリ然レドモ等シク特許權者又ハ其ノ制限附讓受人ヲ以テ被害者ト見ルハ法文ノ趣旨ナリ

本條ノ犯罪ニ關係シテ沒收シタル物件ハ之ヲ特許證主ニ給付ス(第四十六條此規定ハ沒收シタル物件中主タル物件ハ特許侵害者タルヘキ物件ナルヲ以テ官ニ沒收スルモノ之ヲ賣却スルコト能ハス結局破毀スルノ外途ナキヲ以テ事口之ヲ特許ヲ侵害セラレ又ハ少クトモ侵害ノ危險ヲ受ケタル特許證主ニ給付スルノ

便利ナルカ爲メナリ佛國法系ニ此立法例アリ

### 第五節 特許權者ノ義務

特許權者カ特許ヲ受タルニ因リテ當然負フヘキ義務ニアリ(一)特許料納附ノ義務(二)特許標記ノ義務是ナリ

(一)特許料ハ手数料ノ一種ニシテ租税ニ非ス國家カ發明專用權ヲ賦與シ之ヲ保護スル報償トシテ特許證主ヨリ支拂ハシムルモノニシテ收入ノ目的ノ爲メニ賦課徵收スルモノニ非サルナリ(反對說アリ)

特許料ヲ納附スヘキ義務ヲ有スル者ハ特許證主ナリ故ニ之ヲ買入レシ又ハ制限付讓渡ヲ爲シタル場合ニ於テモ買權者又ハ制限付讓受人ハ特許料納付ノ義務無ク特許證主カ之ヲ納付セサルヘカラス

特許料ハ毎年之ヲ納ム初三年ハ毎年金十圓トシ次ノ三年ハ毎年金十五圓トシ順次三年毎ニ金五圓ヲ加フルナリ追加特許ヲ受ケタル下キハ一時ニ特許料二十圓ヲ納ム(第三十九條)

特許料ハ毎年一年分ヲ特許證ノ日付ニ應當スル日ニ於テ前納スヘシ但初年分  
 ノ特許料ト追加特許料トハ特許査定書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムル  
 シテ納付期日ニ於テ納付セズルハ特許料ハ之ヲ還付セス但シ納付期日前ニ於テ前納シ  
 タルモノハ納付期日到達前ニ於テ當事者ヨリ請求セザル場合ニハ之ヲ還付ス(兼  
 四十條)

特許料納付期限後六十日ヲ經過スルモ仍其ノ納付ヲ怠ルトキハ特許局長ハ其  
 ノ特許ヲ取消スコトヲ得(第三十八條第二號)

(二)特許證主ハ其特許品ニ特許ノ標記ヲ附スヘシ(第四十一條)特許標記ヲ特許權  
 者ノ義務トセルハ公衆ノ利益ヲ保護セントスルナリ公衆ハ特許品タルコトヲ  
 知ラサレハ善意ニテ同一物品ヲ製造使用販賣又ハ散布シ又之ヲ爲スルニ種類ノ  
 設備ヲ爲スコトアルヘシ然ルニ其事業ノ半途ニ於テ特許權者ヨリ特許權ノ侵  
 害ヲ主張セラレハ大ナル損害ヲ受ケサルヘカラス故ニ先ツ特許權者ヲシテ  
 特許品タルコトヲ知ルニ足ルヘキ標記ヲ爲サシムルナリ是獨リ公衆ノ利益ナ

ルノミナラス又特許權者ノ利益ナリ

特許權者カ特許標記ヲ付スルコトヲ怠リタルトキハ其ノ特許品タルコトヲ知  
 ラスシテ其ノ權利ヲ侵害シタル者ニ對シテハ要價ノ訴ヲ爲スコトヲ得(第四  
 十九條)是レ特許權者カ特許標記ヲ怠リタル場合ノ唯一ノ制裁ナリ

特許標記ノ義務ハ特許權者ノ義務ニシテ之ヲ怠リタル場合ノ訴權ノ制限モ亦  
 特許權者ニ關シテノミ規定アリ然ラハ特許ヲ制限ヲ付シテ讓受ケタル者ハ特  
 許標記ノ義務ナキヤ義務ナシト云ハサルヘカラス然ラハ特許品タルコトヲ知  
 ラスシテ其權利ヲ侵害シタル者ニ對シテ要價ノ訴ヲ起コスコトヲ得(キヤ余  
 ハ起コスコトヲ得スト信ス讓受人ハ會テ論シタル如ク特許權者ニ非ス故ニ法  
 律上特許標記ノ義務ナキコト明カナリ然レトモ特許權者ハ特許ヲ制限ヲ付シ  
 讓渡シタルカ爲メニ特許標記ノ義務ヲ免カサルヘキニ非ス何トナレハ猶依然特  
 許權者ナルヲ以テナリ從テ其ノ特許品ハ何人ヲシテ製造セザルモ特許標記  
 ヲ付セサルヘカラス標記ヲ爲ササル場合ニハ特許權者ノ要價訴權ハ惡意ノ侵  
 害者ニ對シテノミ存在ス換言スレバ此場合ニハ善意ニテ特許品ヲ製造使用販

賣渡布シタル者ハ特許權ノ侵害ニ因ル賠償義務ナキナリ是レ特許權者カ自ら製造シタル場合ト讓受人カ製造シタル場合ト又特許權者ノ許容ニヨル使用權者カ製造シタル場合トニ依リテ異ナル所ナシ特許ヲ制限ヲ付シテ讓受ケタル者ハ許容ニ依ル使用者ト異ニシテ獨立ナル賠償訴權ヲ有スト雖此訴權ハ特許權ヨリ生スル權利ナルヲ以テ特許權者カ有スル權利ノ範圍ヲ越エテ訴權ヲ有スル理ナシ

(三)以上ノ義務ノ外向帝國内ニ住所ヲ有セタル特許證主ハ帝國内ニ住所ヲ有スル代理人ヲ定メタルヘカラス此代理人ハ特許法及ヒ特許法ニ基キテ發スル命令ノ定ムル所ニ依リ特許局ニ對シテ爲スヘキ手續又ハ特許ニ關スル民事訴訟及ヒ告訴ニ付本人ヲ代表スルモノトス(第六條)特許證主正當ノ事故ナクシテ六ヶ月以上此代理人ヲ置カサルトキハ特許局長ハ其特許ヲ取消スコトアルヘシ(第三十八條)第三號

### 第五章 特許ニ關スル審判

#### 第一節 審判

特許事件ノ裁判ニハ特許ニ關スル特別ノ智識ヲ要スルヲ以テナラス特許ヲ賦與スル官廳ニ於テハ種種ノ便宜ヲ有スルヲ以テ特許ノ成立又ハ其範圍ノ確定等ニ關スル事項ニ關シテハ特許局ニ於テ之ヲ裁判スルノ制ヲ設ク之ヲ審判ト謂フ(審決事項ハ(一)審査官ノ査定ニ對スル不服(第二十八條)(二)特許權ノ確認消極及(第三十條)第三號)特許ノ無効(第三十條)是ナリ此以外ニハ審判事項無ク此事項ニ關シテハ又普通裁判所ニ告訴スルコトヲ得ス

審判ノ決定ヲ審決ト謂フ(審決ハ行政處分ニ非ス)特許事項ニ關スル特別裁判ナリ從テ之ニ關スル法理ハ裁判所ノ判決及ヒ裁判ニ關スル法理ト同シ但無効審決ニ關シテハ稍特色アリ後ニ之ヲ述フヘシ

第一ニ審判官(審査官)ニシテハ特許局長ハ其特許ノ範圍ノ確定及ヒ特許局事務官及ヒ技師之ニ任ス(特許局官制)第四條)特許局長ハ各審判事件ニ付掛審判官ヲ指定



シ其中ノ上席者ヲ以テ審判長トシ審判長ハ二名ノ主査審判官ヲ命ス  
 審判官トシ得明治三十二年勅令第二七九號特許局審判事務章程審判官カ審決ヲ  
 爲スニハ必ず審判評議ヲ經ヘシ評議ハ過半数ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルト  
 キハ審判長之ヲ決ス(同上勅令)審決ニハ必ず理由ヲ付セナルヘカラス(特許法第  
 三十二條第二項)

審判官ハ左ノ事件ニ參與スルコトヲ得ス(同上勅令)

- 一 自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件
- 二 直接又ハ間接ニ利害ノ關係ヲ有シタル事件
- 三 審査官トシテ審査ニ參與シタル事件

右ノ一及二ハ説明ヲ要セス三ハ審判官タル特許局長特許局事務官又ハ特許局  
 技師ハ書ヲ自ラ審査官トシテ審査ニ參與シタル事件ニ關シテハ審判ニ參與ス  
 ルコトヲ得セシメタル規定ナリ此ニ事件ト稱フハ狹ク係争事件其物ト見ルヘ  
 キカ又ハ廣ク其ノ事件ノ目的タル發明意匠又ハ商標ニ關スル一切ノ事件ト見  
 ルヘキカハ疑問アル所ナリ此ニ參照スヘキ法規四アリ(一)辯護士法第十四條(二)

雜 談

○家資分産ノ宣告ト公民権ノ停止ニ關シテ家資分産又ハ破産ノ宣告ヲ受ケタル者  
 カ抗告ヲ爲シタル結果其決定ヲ取消サレタルトキニ於テモ其者ハ市制第九條  
 第二項町村制第九條第一項ニ依リ公權ヲ停止セラレヘキカ將タ同條ニ「復權ノ  
 決定アルマデ」トアルカ故ニ裁判所カ復權ノ決定ヲ爲スヘキ場合即チ破産法第  
 千五十五條及ヒ第一千五百六條ノ規定ニ依リ復權ヲ命スヘキ場合ニ非サレハ初  
 ヲリ公權停止ノ效果ヲ生ゼサルモノト解スヘキカ(家資分産法第四條第二項若  
 シ後段ノ如ク解釋スヘキモノトセハ)家資分産又ハ破産ノ宣告力取消サレタル  
 トキハ復權ノ決定ヲ爲スヘキ事實ヲ生ゼサルカ故ニ公權モ亦曾テ停止セラレ  
 ズモノト解セタルヘカラス要スルニ本問ハ市制町村制ニ所謂家資分産又ハ  
 破産ノ宣告者其確定ヲ待チテ始メテ公權停止ノ效力ヲ生ズルモノナルカ將  
 宣告ト同時ニ其效力ヲ生ズルモノナルカハ行政裁判所ハ曰ク町村制第九  
 條第二項ニ「單ニ家資分産若クハ破産ノ宣告ヲ受ケタル者」トアルヲ以テ尙

○其宣告ヲ受ケタル者ハ本項ニ從當直ニ其時ヲ以テ公民權ヲ停止セラルル者ト謂ハサルヲ得ス(行政裁判所明治三十六年九月十八日第一號會報員失職)

○町村役場書記ノ職務ハ町村制ニハ書記ハ町村長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス同制第七二條トアルニミテ外部ニ對シ如何ナル權限ヲ有スルカニ付キ明文ナキヲ以テ疑問ヲ生スルヲ免レタルベシ之ヲ理由書ニ徵スルニ書記其他技術上ニ要スル吏員アリ又使丁ナル者アリ機械的ニ使用スル者トス(トアレドモ其機械的ニ使用スル者トス)ト書記ニモ繁ル文字ナリヤ否ヤ文法上亦不明ニ屬ス今裁判所ヨリ村長ニ送達ホキ書類ヲ書記ニ送達シタル事實ニ對シ大審院ハ判決シテ曰ク「村役場書記ハ村長ニ隸屬シテ庶務ヲ執ルモノナルカ故ニ特ニ村長其人ニ屬スル事務ノ外ハ村長ノ事故アル場合ニ在テ書記カ代テ其事務ヲ執ルハ當然ノ事ニ屬ス而シテ期日呼出ヲ本人ニ送達スルモト能ハザリシ事情ハ明治三十六年三月二十八日ニ長太郎ニ對シ執行シタル豫審終結決定書ノ送達證書ニ本人不在ナルヲ以テ村役場書記ニ送達シタル事跡ヲ以テ之ヲ認ムルコトヲ得ヘシ旁被告長太郎カ公判ニ出頭セザリシハ同人ノ懈怠タルコト甚タ明カ

ナリト(大審院明治三十六年九月十九日第一〇三號會報員失職)

○區ノ書記ト財産保管ノ義務 區役所ノ書記カ取扱ヲ命セラレタル金錢ヲ費消シタルトキハ所謂監守盜刑法第二八九條ノ罪ニ開擬セラルヘキカ換言スレハ區ノ書記ハ區ノ金錢ヲ保管スルノ義務ヲ負フ場合アリヤ大審院ハ曰ク東京市京都市大阪市ノ區ニ關スル明治三十一年九月勅令第二百十號第三條ニ區長ニ於テ財産營造物ニ關スル事務其他區ニ屬スル事務ヲ處理スルニ付テハ市ノ事務ニ關スル規定ヲ準用ストアリ而シテ市制第六十七條ニヨレハ市長ハ市參事會ノ議決ヲ執行スル理事者ニシテ市政一切ノ事務ヲ指揮監督スルモノナルコト明了ナレハ區有財産及ヒ區ノ事務ニ付キ市長カ市ニ於ケルト同様ナル職權ヲ有スル區長ニ於テ區有財産ノ管理行為ヲ爲スル職權アルコト亦タ疑ヒナレバニ然ラハ區長カ其附屬員タル區書記ニ命シテ區有財産ノ利子ヲ受領シ之ヲ市稅金取扱所ニ納入スルノ手續ヲナシムルハ即チ區事務ノ分擔ニ外ナラナレハ被告佐々木勝朝(書記)カ本件原判決第八及ヒ第十五ノ如ク區有財産ノ保管所ナル市役所ニ於テ區有財産ノ利札ヲ受取り第三銀行ニテ現金ニ引換ヘ之ヲ

日本橋區役所出納掛長ニ交付スル行爲ハ區書記トシテノ職務上ノ行爲ナレハ交付ノ手續ヲ爲ス迄ノ間ニ於テハ被告カ職務上其利子金ヲ保管スルノ責任ヲルコト疑ナシ故ニ原判決ニ於テ監守盜トシテ擬律シタルハ相當ニシラ云云ト

(大審院明治三十六年(一)第一八三三號公印並用公文書部編定行)

○戸籍謄本ノ性質ニ於テ戸籍ノ謄本ハ人民ノ請求ニ因リ戸籍吏之ヲ作成シ其原本ト相違ナキ旨ヲ附記シ職氏名ヲ署シ職印ヲ押捺シテ交付スルモノナルカ戸籍法第一七四條第一三條其謄本ハ公文書刑法第二〇三條明治二十三年法律第百號ナリヤ將タ公證文書刑法第二〇四條二十三年法律第百號ナリヤ大審院ハ曰ク戸籍簿ノ謄本ハ戸籍簿内容ノ事項ヲ證明シテ人民ニ下付スル文書ニアラズシテ戸籍簿ノ記載其儘ヲ謄寫シテ人民ニ下付スルモノニ外ナラスシテ戸籍簿其者ト更ニ異ナル所ナシ故ニ戸籍簿其者カ公文書ナル以上ハ其謄本ノ公文書タルコト論ヲ待タサルニ當リ云云ト

(大審院明治三十六年(一)第一八三〇號公印並用公文書部編定行)

(大審院明治三十六年(一)第一八三〇號公印並用公文書部編定行)

(注意) 校外生月謝納付ノ際ハ必ス本紙ヲ切抜キ居所、氏名及爲替番號、金額、並ニ月謝ノ月別若クハ何月分ヨリ何月分迄ト記入シ爲替券ニ添附スルモノトス

納付書

爲替番號 ( )

一金

但三十六年度特別法

月分月謝

右納付候也

居所

明治三十六年 月 日

法政大學會計局御中

納付書

爲替番號 ( )

一金

但三十六年度特別法

月分月謝

右納付候也

居所

明治三十六年 月 日

法政大學會計局御中

# 法學志林

一、部定價金十二圓  
二、部定價金一圓  
三、部定價金一圓  
四、部定價金一圓  
五、部定價金一圓  
六、部定價金一圓  
七、部定價金一圓  
八、部定價金一圓  
九、部定價金一圓  
十、部定價金一圓  
共一圓

## 第五十二號目次 (二月十五日發行)

### 志林

○最近判例批評(其十六) 法學博士 梅澤次郎  
○特權廢止問題 辯護士 信岡雄四郎  
○國家有機體說 法學士 寬 克彦  
○維新以後我國法學趨勢 法學士 加藤 正治

### 纂論

○發起人力會社ノ爲メニ爲シタル行爲ノ會社ニ  
法科大學生 佐竹 三香

### 解疑

○一部主權國ノ意義 法學士 松本 澄治  
其效力ヲ及ボス理由 法學士 秋山雅之介

### 寄書

○廣告取消ノ效果ヲ論ス 能美房太郎

### 判例

○大審院新判例 三十件

### 其他雜報、記事等

○發行人力會社ノ爲メニ爲シタル行爲ノ會社ニ

發行所 司法部指定 私立法政大學

(明治三十六年十一月十二日第三種郵便物認可)  
每月十四日、三日、五日、八日、十一日、十五日、十八日、廿一日、廿五日、廿八日發行

明治三十七年一月卅一日印刷  
明治三十七年二月三日發行  
(定價金貳拾錢)

編輯者 東京市牛込區牛込北町十番地 萩原 敬之

印刷者 東京市牛込區矢來町三番地 小宮山 信好

印刷所 東京市芝區四ノ久保明善町十一番地 金子 活版所

發行所 東京市總町區富士見町六丁目十六番地  
司法部指定 法政大學  
(電話番町百七十四番)